

# 岡本韋庵『大日本中興先覺志』訳註（その二）

（本稿は徳島大学言語文化研究12の続きである）

僧月照

有馬卓也

目次

先覺志序（林琴南）

大日本中興先覺志序（岡本韋庵）

凡例

上卷

徳川公齊昭・藤田東湖・梁川星巖・藤森天山・佐久間象山・堀田正睦・島津公齊彬・西郷隆盛（以上その一）

僧月照・僧月性・梅田雲濱・頼三樹三郎・橋本左内・吉田松陰・金子孫二郎・大橋訥菴・堀利熙（以上その二）

下卷

宮部鼎蔵・真木和泉・平野二郎・有馬新七・中山公子忠光・川上弥一・清水精一郎・武田耕雲斎・久坂玄瑞・高杉晋作・月形洗蔵・野村望東・駒井躋庵・武市瑞山・坂本龍馬・大村益次郎・岩倉公具規・三条公実美

跋（伊藤賢道）

\*人名に関する註について、（その一）と重複するものは「既出」としたが、加筆の要ありと判断した場合は改めて記した。

我国僧侶、効身君国者、莫非祖宗遺訓使然。而亦能達釈氏濟度之說者也、如月照・月性不其然乎。月照於西郷隆盛、殆所謂同功一体者矣。月照、初名宗久、称久丸。大坂人玉井鼎斎長男也。鼎斎、称宗江。以医為業。文政十年。携宗久詣清水寺成就院、托其住持藏海上人為僧。時年十五。剃髮曰忍鎧。為人慷慨重氣節。天保六年乙未。年二十有四。代師住持其寺。改名忍向、号月照。嘉永七年甲寅春。讓寺職於弟信海、歷遊東北諸国、以窺諸藩動靜。歸京寓高台寺春光院。広接四方志士。称和歌会、出入諸公卿門。或損私財保庇志士。安政四年丁巳冬。美艦泊浦賀港、天下洶洶。先帝深憂之。月照嘗在東福寺山莊、断火食祈攘夷。左大臣近衛忠熙、深嘉其志、命在清水寺祈誓。月照大喜、謂清水寺喧噪。遣信海于高野修法。天皇聞之、勅授神鏡・宝劍以禳妖氛。月照益感激、凝精誠修秘法。天皇賞其誠忠、至賜御書御衣。及天下別勅于水戸藩、月照百方尽心、与左府老女村岡謀、自後門出入。及志士就縛、左府命避禍薩摩。九月十日。月照乃与西郷隆盛・海江田信義等同發京。告隆盛等曰、有敵来迫者、斬之勿疑。至伏見。捕吏果追及。見隆盛等載月照于轎護衛而往。不敢迫。聞島津侯稅駕下関、

買舟而發。十月朔。達下関。則侯既帰国。因投白石正一郎家。以其厚遇勤王志士也。隆盛告月照至筑前留、俟已告其主来迎。聞幕吏追跡甚急、乃去至博多、隱于北條右門家。又去至上坐郡大庭村、入竹内五百都家。遇福岡藩士平野二郎等来勸潜行。改名静溪院鑊水、偽装道士、下筑後川。經久留米至薩摩市来関。関吏誰何、不得入。転取迂路。十月八日。達鹿兒島訪隆盛。会薩侯斉彬病薨。執政島津豊後等、務媚幕府、勢不可如何。相對而哭。隆盛托月照等于其所知僧。居数日、捕吏又至。十五日。夜将半。隆盛遽訪月照寓。月照与二郎出尊接之。隆盛眼光如炬。長大息而坐。憂憤之色、顯于面眉。月照察之。命二郎入厨煎茶。隆盛乃謂月照曰、幕府命福岡藩捕師与国臣。福岡捕吏、来探市街。参政諭旨、使至日向避之。月照曰、吁、我知之矣。日州我死所也。予頭已托子之一劍。苟死同志之手、死無遺憾矣。隆盛曰、不使師独死也。告二郎避難艤舟于御舟浦。時大月霽朗、銀波蕩漾。開宴吟賞。隆盛曰、今日之談、不可涉慷慨。酒酣、月照書和歌示隆盛。隆盛受而懷之。与月照出船頭、相抱投海。国臣等大驚、急命舟子拯之。隆盛幸蘇。而月照則不可救矣。隆盛夾囊中。有月照国詩曰、

大君能為爾波何加惜加良牟薩摩能瀬門爾身波沈無登毛

月照死時、年四十六。葬於薩東林禪寺。是為安政五年。幕府捕信海訊鞠。信海毫無屈色、極口罵詈時政、無所忌憚。明年三月。病死於獄中。年三十九云。月照投海之辭、一讀使人悲憤不息。何其壯也。聞月照学国詩於近衛公、登其門籍。又善詩。其逸題云、

報告之時時則然 与君把臂稍怡顏 感恩一滴丈夫淚

期瀝三千世界間

其説横浜会盟載書云、

辱莫辱於城下盟 廟堂諸老若為情 東溟難洗墨夷勅

日本国王遵奉名

我雖方外亦王臣 敵愾心期靖虜塵 不分滿庭当局者

講和潤色太平春

人評其正氣凜然、不似方外人。殊不知仏法如此、方能成其為仏也。

我が国の僧侶、身を君国に効せし者は、祖宗の遺訓の然らしむるに非ざるはなし。而れども亦能く釈氏の濟度<sup>さいど</sup>の説に達せし者は、月照・月性の如き其れ然らざらんや。月照は西郷隆盛に於て殆ど<sup>ほとん</sup>と所謂同功一体なる者なり。月照、初名は宗久、称は久丸。大坂の人玉井鼎齋の長男なり。鼎齋、称は宗江。医を以て業と為す。文政十年。宗久を携へて清水寺成就院に詣り、其の住持藏海上人に托して僧と為す。時に年十五。剃髮して忍鎧<sup>にんがい</sup>と曰ふ。人と為り慷慨にして氣節を重んず。天保六年乙未。年二十有四。師に代はりて其の寺を住持す。名を忍向と改め、月照と号す。嘉永七年甲寅春。寺職を弟の信海に譲り、東北諸国を歴遊し、以て諸藩の動静を窺ふ。京に帰り高台寺春光院に寓す。広く四方の志士に接す。和歌会と称して、諸公卿の門に出入す。或いは私財を損して志士を保庇す。安政四年丁巳冬。美艦、浦賀港泊し、天下洶洶たり。先帝、深く之を憂ふ。月照、嘗て東福寺山荘に在りしとき、火食を断ちて攘夷を祈る。左大臣近衛忠熙、深く其の志を嘉みし、命じて清水寺に在りて祈誓せしむ。月照、大いに喜び、謂らく「清水寺は喧噪なり。信海を高野に遣りて法

を修めしめん」と。天皇、之を聞き、勅して神鏡・宝剣を授けて以て妖氣を禳はしむ。月照、益ます感激し、精誠を凝らして秘法を修む。天皇、其の誠忠を賞し、御書・御衣を賜ふに至る。天皇の別勅を水戸藩に下すに及び、月照、百方心を尽くし、左府の老女村岡と謀りて、後門より出入す。志士の縛に就くに及び、左府、命じて禍を薩摩に避けしむ。九月十日、月照、乃ち西郷隆盛・海江田信義等と共に京を発す。隆盛等に告げて曰く「敵の来り迫る者あらば、之を斬りて疑ふなかれ」と。伏見に至る。捕吏、果して追い及ぶ。隆盛等の月照を轎に載せて護衛して往くを見る。敢て迫らず。島津侯の下関に税駕するを聞き、舟を買ひて発す。十月朔。下関に達す。則ち侯既に国に帰る。因りて白石正一郎の家<sup>③</sup>に投ず。其の厚く勤王の志士を遇するを以てなり。隆盛、月照に告げて筑前に至り留まり、己の其の主<sup>ま</sup>に告げて来り迎ふるを俟たしむ。幕吏の追跡すること甚だ急なるを聞き、乃ち博多に至りて北條右門の家<sup>ま</sup>に隠る。又去りて上坐郡大庭村に至り、竹内五百都の家に入る。福岡藩士平野二郎等の来りて潜行するを勧むるに遇ふ。名を静溪院鑊水と改め、偽りて道士を装ひ、筑後川を下る。久留米を経て薩摩市来の関に至る。関吏誰<sup>いか</sup>何し、入るを得ず。転じて迂路を取る。十月八日。鹿児島に達し隆盛を訪ぬ。薩侯<sup>なりあきら</sup>杉の病に薨するに会す。執政島津豊後等、務めて幕府に媚び、勢、如何ともすべからず。相對して哭す。隆盛、月照等を其の知る所の僧に托す。居ること数日、捕吏又至る。十五日。夜、將に<sup>な</sup>半<sup>かば</sup>ならんとす。隆盛、遽<sup>はか</sup>に月照の寓を訪ぬ。月照と二郎と蓐を出でて之に接す。隆盛の眼光、炬の如し。長大

息して坐す。憂憤の色、面眉に顯はる。月照、之を察す。二郎に命じて厨に入りて茶を煎せしむ。隆盛、乃ち月照に謂ひて曰く「幕府、福岡藩に命じて、師と国臣とを捕へしむ。福岡の捕吏、来りて市街を探す。参政諭旨し、日向に至りて之を避けしむ」と。月照曰く「吁、我、之を知れり。日州<sup>あ</sup>は我が死所なり。予の頭は已に子の一劍に托す。苟<sup>いか</sup>も同志の手に死なば、死すとも遺憾なし」と。隆盛曰く「師をして独り死なしめず」と。二郎に告げて艤舟<sup>みふねのう</sup>を御舟<sup>う</sup>浦に避難せしむ。時に大月壽朗<sup>④</sup>にして、銀波蕩漾<sup>⑤</sup>なり。宴を開きて吟賞す。隆盛曰く「今日の談は、慷慨に涉るべからず」と。酒酣<sup>たけなわ</sup>にして、月照、和歌を書して隆盛に示す。隆盛、受けて之を懷にす。月照と船頭に出で、相抱きて海に投ず。国臣等、大いに驚き、急ぎて舟子に命じて之を拯<sup>すく</sup>はしむ。隆盛は幸いに蘇す。而れども月照は則ち救ふべからず。隆盛、囊中に<sup>さしはさ</sup>夾<sup>さ</sup>みしものあり。月照の国詩ありて曰く、

大君の為には何か惜からむ 薩摩の瀬門に身は沈むとも

月照の死せし時、年四十六、薩の東林禅寺に葬る。是れ安政五年たり。幕府、信海を捕へて訊鞫<sup>⑥</sup>す。信海、毫も屈色なく、口を極めて時政を罵詈し、忌憚する所なし。明年三月。病みて獄中に死す。年三十九と云ふ。月照の海に投ずるの辞は、一読して人をして悲憤して息まざらしむ。何ぞ其れ壮なる。月照は国詩を近衛公に学び、其の門籍に登る<sup>⑦</sup>と聞く。又、詩を善くす。其の逸題に云ふ、

報じ告するの時は 時 則ち然り  
君と臂を把りて 稍顔<sup>やうこ</sup>を 怡<sup>よろこ</sup>ばす<sup>(14)</sup>  
恩に感ず 一滴 丈夫の涙  
灑<sup>そそ</sup>がんと期す 三千世界の間

其の「読横浜会盟載書」に云ふ、

辱は城下の盟より辱なるはなし  
廟堂の諸老 情を為すがごとし  
東溟 洗ひ難し 墨夷の勅  
日本国王 遵奉の名

我 方外<sup>(15)</sup>と雖も 亦 王臣  
敵愾心に期す 虜塵を靖するを  
不分なり 満庭 当局の者  
和を講じて潤色す 太平の春

人、其の正気の凜然<sup>(16)</sup>として、方外の人に似ざるを評す。殊に  
仏法の此の如きを知らざるも、方<sup>まさ</sup>に能く其の仏と為るを成すな  
り。

—註—

(1) 仏の道によつて衆生を救い極楽へと導くこと。

(2) さわぎどよめく様。

(3) 安政五年の外交処置についての勅問の際に、諸大名の意見を徴すべきであるとし、また朝幕間の融和をはかった九条尚忠を失脚させようとするなどしたが、長野主膳や酒井忠義らによつて辞官・落卿へと追い込まれた。

(4) 不吉な事がおこりそうな気配。

(5) 津崎矩子。幼い時から近衛家に仕え、村岡局と称した。安政末期、主人の近衛忠熙の側近として、在野の諸志士との連絡・周旋に努めた。

(6) 薩摩藩士有村俊斎のこと。有村三兄弟(次男雄助・三男治左衛門)の長兄。薩摩藩勤王派の中核として西郷隆盛らの盟友であった。維新後、子爵海江田信義となった。

(7) 休息すること。

(8) 下関で海陸運送を営んでいた商人。幕末期には薩長を中心とした志士、或いは七卿らを私財を投じて庇護した。

(9) 日向(現宮崎)のこと。

(10) 晴れ渡っていること。晴朗に同じ。

(11) 水がゆらゆらと動くさま。

(12) 罪人を取り調べること。

(13) ここでは門人としての出入り資格者として認められたということ。

(14) 顔色を和らげること。

(15) ここでは僧侶のこと。

(16) きりつとした様。

## 僧月性

月性者、周防国大島郡遠崎村明円寺住僧也。字知円。為人佯狂憂國。嘗読泰西史、知西班牙以天主教誘呱哇人、遂奪其國、慨然揮淚曰、彼得民心有此教而已。我亦宜以宗教固結我民。每說法、寓尊攘意。言言懇惻、声淚俱下。庶民感激、翕然趨之。聽者常數百千人。声名噪于遠邇。号海防僧。安政三年丙辰。本願寺法主、召月性給俸錢、置之東山別院。嘗与頼三樹飲於月波楼、醉後慷慨、說法陳尊攘意。三樹等皆泣矣。梅田雲濱与月性交善。一日談及紀伊海備。告月性、往説其藩。月性至和歌山。藩老久野某迎見。大嘉其説、歎称曰、以方外人杞憂如此。吾輩肉食、豈無忸怩乎。當是時、幕府方墾蝦夷、命本願寺主、遣其徒往教導居民。月性膺其選、將往不果。居一年辭歸。喪母哀痛親作狀。悲泣淋漓、讀者垂淚。五年春。月性暴病而死。年四十二。月性狀貌魁梧、好酒善詩。自号清狂。蓋取諸陸游詩酒清狂二十年之句。歷游四方、与天下名士交。一時有名儒家、皆作文貽之。時論比之靈一・浩然。其少時出郷也、題壁曰、

男兒立志出郷関

学若無成死不還

埋骨豈期墳墓地

人間到处有青山

平生土木形骸、破衲敝履、頭如栗壳。旅舍人往々認為越獄人拒之。或戲擬之剃刀、輒掩頭逃匿如嬰兒。性恢弘、擲金如土。与人議論不合、奮袂叱咤。狀如夜叉云。月性防海之志、深達釈氏之旨者也。余独恨其不与志士同赴蝦夷。假令幕府諸吏有遠慮於此、以鼓舞一世、則月性等諸人、将爭先奮前。沿海防禦嚴修、而開鎖之權在我。

天下又何有不可為之事哉。

月性は周防国大島郡遠崎村明円寺の住僧なり。字は知円。人と為りは佯狂憂國。嘗て泰西史を讀みて西班牙の天主教を以て呱哇人を誘ひ、遂に其の國を奪ふを知りて、慨然として涙を揮ひて曰く「彼の民心を得んとして此の教あるのみ。我も亦宜しく宗教を以て我が民を團結すべし」と。法を説く毎に、尊攘の意に寓す。言言懇惻にして、声淚俱に下る。庶民感激し、翕然として之に趨る。聽く者常に數百千人。声名、遠邇に噪なり。海防僧と号す。安政三年丙辰。本願寺法主、月性を召して俸錢を給し、之を東山別院に置く。嘗て頼三樹と月波楼に飲み、酔ひて後に慷慨し、法を説き尊攘の意を陳ぶ。三樹等、皆泣く。梅田雲濱は月性と交はりて善し。一日、談、紀伊の海備に及ぶ。月性に告ぐ「往きて其の藩を説かん」と。月性、和歌山に至る。藩老久野某、迎え見ゆ。大いに其の説を嘉とするも、歎じて称して曰く「以て外人に方るに杞憂すること此の如し。吾輩肉食するに、豈に忸怩たることなからんや」と。是の時に當り、幕府、方に蝦夷を墾せんとし、本願寺主に命じて、其の徒をして往きて居民を教導せしめんとす。月性、其の選に膺らんとし、將に往かんとして果せず。居ること一年にして辭して歸る。母を喪ひ親を哀痛して狀を作る。悲泣淋漓、読む者涙を垂らす。五年春。月性、暴に病みて死す。年四十二。月性の狀貌魁梧にして、酒を好み詩を善くす。自ら清狂と号す。蓋し諸を陸游の詩「酒清狂二十年」の句より取る。四方を歴游し、天下の名士

と交はる。一時の名ある儒家は、皆、文を作れば之を貽<sup>おく</sup>る。時論は之を靈一・浩然<sup>Ⅱ</sup>に比す。其の少<sup>わか</sup>き時に郷を出づるや、壁に題して曰く、

男児 志を立てて郷関を出づ

学若<sup>も</sup>し成ることなくんば 死すとも還らず

骨を埋むるに 豈に墳墓の地を期せんや

人間 到る処 青山<sup>Ⅱ</sup>あり

平生は土木のごとき形骸にして、破<sup>は</sup>衲<sup>な</sup>敝<sup>へい</sup>履<sup>り</sup><sup>Ⅲ</sup>、頭は栗<sup>から</sup>壳<sup>か</sup><sup>Ⅳ</sup>の如し。旅舎の人、往々にして認じて越獄の人と為し、之を拒む。或は、戯れに之に剃刀せんと擬<sup>ほ</sup>すれば、輒<sup>お</sup>ち頭を掩<sup>お</sup>ひて逃げ匿<sup>かく</sup>れ嬰兒の如し。性恢弘<sup>Ⅴ</sup>にして、金を擲<sup>な</sup>づ<sup>づ</sup>つこと土の如し。人と議論して合せざれば、袂を奮ひて叱咤す。状、夜叉の如しと云ふ。月性の防海の志は、深く釈氏の旨に達する者なり。余、独り其の志士と<sup>とも</sup>に蝦夷へ赴かざるを恨む。仮<sup>たと</sup>令<sup>ひ</sup>幕府の諸吏の此に遠慮することあるとも、一世を鼓舞するを以てすれば、則ち月性等諸人、將に先を争ひて奮<sup>す</sup>つて前<sup>す</sup>まん。沿海の防禦嚴修なれば、開鎖の権も我に在らん。天下、又何ぞ為すべからざるの事あらんや。

—註—

(1) 真心がこもっていてねんごろであること。

(2) 集まるさま。

(3) 遠近。

(4) さわがしいこと。

(5) 頼三樹三郎のこと。

(6) 心に恥るさま。

(7) 書き付け、手紙のこと。

(8) 水・汗・血などがしたたるさま。

(9) 体が大きくて立派なこと。

(10) 宋代の詩人。字は務観、号は放翁。

(11) 釈(俗姓は呉) 靈一と孟浩然のこと。ともに唐代の詩人。

(12) あおあおと樹木の茂っている山。蘇軾の詩の「青山 骨を埋むべし(男子はこの青山でも骨を埋めることができる)」を典故とする。

(13) 破れた衣と破れたくつ。

(14) 般の略字。

(15) 心が広いこと。

#### 梅田雲濱

嘉安之間、儒生在京師唱大義者、推梅田雲濱・頼三樹三郎等為巨擘。雲濱名定明、字義質、称源次郎。雲濱其号。若狭人。世仕小浜藩。父曰矢部重介。雲濱其第二子。父本姓梅田氏、為矢部某義子。故改焉。幼而好学。天資豪爽。嘗抵江戸、入林大学頭門八年。与藤森天山・佐久間象山・藤田東湖等親善。年三十余。下帷京師。時藩侯為京都所司代。召之講書。礼頗倨。雲濱辞使者曰、

以旧臣使役之。雖抱閔擊柝。不敢奉承乎。若欲迎師問道、則其礼不可忽諸。使者再三來召之、竟不起。自謂、吾為藩士故接此不快。若処士則安矣。自是不帶双刀、甘心放廢。或難其無礼於君。笑曰、此雲濱之所以為雲濱也。君等焉得知之。日夕會友縱飲、召妓助興、散財如土芥。私計窘甚質錢滿沒。妻子歎訴不聽。曰、心大則百物通。既而游長門、与高杉晋作・僧月性等交善。大唱尊攘。安政元年甲寅九月。俄艦入大坂港、請詣朝貴。人心洶洶。謀逐之。十津川処士會議、推雲濱為帥。雲濱投袂而起。時妻病。泣尼其行。歎曰、以家事廢国事、吾不能也。賦詩曰、

妻臥病牀兒叫饑 挺身直欲攘戎夷 今朝死別兼生別

唯有皇天后土知

会俄艦去、帰家則妻已死矣。尋有各国兵艦窺武相海岸。頗慢侮。朝廷命幕府急攘之。幕府不聽、益唱開港。雲濱憤甚。乃与山科出雲守・豊嶋太宰少弐・小林民部権大輔・高橋兵部権大輔・若松木工頭・春日讃岐守・森寺因幡守・丹羽豊前守・田中河内介・飯田左馬・伊丹蔵人・三國大学・宇喜多一蕙・梁川星巖・頼三樹・池内陶所、及成就院月照・妙圓寺信海等密議、将奉朝旨果義挙。有橋本左内・清川八郎・安積五郎等自江戸来。賛其議。安島帶刀・日下部伊三次・飯泉喜内・藤森弘菴等、在江戸為応援。雲濱建議、宜莫如推水戸藩前中納言徳川斉昭為帥。衆然之。告青蓮院栗田宮、及左大臣近衛忠熙・右大臣鷹司輔熙・内大臣三条実万・大納言久我建通・大納言一条実良・大納言中山忠能等密奏。先是幕府元老井伊直弼、遣其臣長野主膳于京師、説関白九条忠尚變攘夷勅。主

膳聞志士建議大驚、報諸直弼。直弼將捕志士、命主膳陰索其党。会尾張・越前諸藩主密議、欲立斉昭七子刑部卿一橋慶喜為將軍儲嗣、奉朝旨決大局。使橋本左内・日下部伊三次等奏之。二人告之小林民部大輔。民部感喜、乃与雲濱・三樹・星巖・陶所等謀、執掌竭力。朝廷伝内旨於斉昭、輔翼慶喜。直弼聞之、遽納紀藩主徳川家茂為將軍嗣。益肆其所欲。五年三月。命関老間部詮勝上京、称候天機、献金帛于諸公卿。十月。遂使町奉行岡部前常等、捕志士二十余人。雲濱亦在其中。又命所司代酒井忠義奏請、幽青蓮院及公卿数人。十二月。檻致雲濱・三樹等三十余人于江戸。雲濱在小倉藩邸獄。幕吏謂曰、汝欲托尊攘滅幕府。必有主使者。雲濱夷然曰、吾生知尊攘大義耳。不知其他也。吏考訊百方。或使坐円木上膝上積石。至肉裂骨碎、体無完膚、而終不易其言。吏与藥看護、終獲不死。明年九月十四日。遂瘦死于獄中。年四十四。嗚呼、雲濱丈夫哉。安政中。余在京師、寓池内氏数月而去。當時雲濱声望、不及陶所遠甚。蓋其学行不滿意也。假令雲濱無事而死、安得有後世之名。以今言之、當時儒流与雲濱競榮者、果有幾人。雲濱之学而如此。豈非以其一死報国乎。予於雲濱有感焉。明治初。余辱柯太之任、遇俄人侵侮。苟使予死于彼地乎、其功名決不在雲濱之下矣。予嫌其涉過激、甘為淮陰胯下之態。可勝歎哉。

嘉安二の年、儒生の京師に在りて大義を唱ふる者、梅田雲濱・頼三樹三郎等を推して巨擘（きよば）と為す。雲濱、名は定明、字は義質、称は源次郎。雲濱は其の号なり。若狭の人なり。世よ小浜

藩に仕ふ。父は矢部重介と曰ふ。雲濱は其の第二子なり。父の本姓は梅田氏、矢部某の義子と為る。故に改む。幼くして学を好む。天資豪爽なり。嘗て江戸に<sup>いた</sup>抵り、林大学頭の門に入ること八年。藤森天山・佐久間象山・藤田東湖等と親善たり。年三十余。帷を京師に下す。時に藩侯は京都所司代たり。之を召して書を講ぜしむ。礼頗る<sup>おご</sup>倨る。雲濱、使者に辞して曰く「旧臣なるを以て之を使役す。抱閔擊析<sup>きせ</sup>せしむと雖も、敢て奉じ承けず。若し師を迎へ道を聞かんと欲せば、則ち其の礼は<sup>これ</sup>諸を<sup>ゆる</sup>忽にするべからず」と。使者、再三来りて之を召すも、<sup>つひ</sup>竟に起たず。自ら謂らく「吾、藩士たるが故に此に接して不快なり。若し処士なれば則ち安んぜん」と。是より双刀を帶せず。甘心<sup>ま</sup>して放廢す。或ひと其の君に礼なきを難ず。笑ひて曰く「此れ雲濱の雲濱たる所以なり。君等<sup>いづくん</sup>焉。ぞ之を知るを得んや」と。日夕、友と会し<sup>ほし</sup>縦に<sup>いまま</sup>飲し、妓を召して興を助けしめ、財を散ずること土芥の如し。私計<sup>く</sup>窘しきこと甚しく、質錢して満没す<sup>き</sup>。妻子歎じて訴ふるも聴かず。曰く「心大なれば則ち百物通ず」と。既にして長門に遊び、高杉晋作・僧月性等と交善たり。大いに尊攘を唱ふ。安政元年甲寅九月。俄<sup>いた</sup>艦、大坂港に入り、朝貴に詣らんと請ふ。人心洶洶たり。之を逐はんと謀る。十津川の処士、會議し、雲濱を推して帥と為す。雲濱、袂を投じて起つ。時に妻病む。泣きて其の行くを<sup>とど</sup>尼む。歎じて曰く「家事を以て国事を廢するは、吾、能くせざるなり」と。詩を賦して曰く、

妻は病牀に臥して児は<sup>うえ</sup>饑に<sup>な</sup>叫く

身を挺して<sup>ただち</sup>直に戎夷を攘はんと欲す  
今朝 死別と生別と

唯だ皇天后土の知るあり

俄艦の去るに会し、家に帰らば則ち妻已に死せり。尋で各国兵艦の武相の海岸を窺ふあり。頗る慢侮なり。朝廷、幕府に命じて急ぎて之を攘はしむ。幕府聴かずして益ます開港を唱ふ。雲濱、憤ること甚だし。乃ち山科出雲守<sup>き</sup>・豊嶋太宰少式<sup>き</sup>・小林民部権大輔<sup>い</sup>・高橋兵部権大輔<sup>い</sup>・若松木工頭<sup>い</sup>・春日讃岐守<sup>い</sup>・森寺因幡守<sup>い</sup>・丹羽豊前守<sup>い</sup>・田中河内介<sup>い</sup>・飯田左馬<sup>い</sup>・伊丹藏人<sup>い</sup>・三国大学<sup>い</sup>・宇喜多一惠<sup>い</sup>・梁川星巖・頼三樹・池内陶所<sup>い</sup>、及び成就院月照・妙圓寺信海等と密議し、將に朝旨を奉じて義拳を果さんとす。橋本左内・清川八郎<sup>い</sup>・安積五郎<sup>い</sup>等の江戸より来るあり。其の議に賛す。安島<sup>あじま</sup>帶刀<sup>い</sup>・日下部伊三次<sup>い</sup>・飯泉喜内・藤森弘菴等、江戸に在りて応援を為す。雲濱、建議して、宜しく水戸藩の前の中納言徳川斉昭を推して帥と為すにしくはなしとす。衆、之を然りとす。青蓮院栗田宮<sup>い</sup>、及び左大臣近衛忠熙<sup>い</sup>・右大臣鷹司輔熙<sup>い</sup>・内大臣三条実万<sup>い</sup>・大納言久我建通<sup>い</sup>・大納言一条実良<sup>い</sup>・大納言中山忠能<sup>い</sup>等に告げて密に奏せしむ。是より先、幕府の元老井伊直弼、其の臣長野主膳<sup>い</sup>を京師に遣して、関白九条忠尚に説きて攘夷の勅を変ぜしむ。主膳、志士の建議を聞きて大いに



驚き、諸を直弼に報ず。直弼、將に志士を捕へんとし、主膳に命じて陰に其の党を索めしむ。尾張・越前の諸藩主を会して密議し、斉昭の七子刑部卿一橋慶喜を立てて將軍の儲嗣と為し、朝旨を奉じて大局を決せんと欲す。橋本左内・日下部伊三次等をして之を奏せしむ。二人、之を小林民部大輔に告ぐ。民部、感じ喜び、乃ち雲濱・三樹・星巖・陶所等と謀り、鞅掌竭力す。朝廷、内旨を斉昭に伝へ、慶喜を輔翼す。直弼、之を聞き、遽に紀藩主徳川家茂を納れて將軍の嗣と為す。益ます其の欲する所を肆にす。五年三月。閣老間部詮勝に命じて京に上り、天機を候ふと称して、金帛を諸公卿に献ぜしむ。十月。遂に町奉行岡部前常等をして、志士二十余人を捕へしむ。雲濱も亦其の中に在り。又所司代酒井忠義に命じて奏請せしめ、青蓮院及び公卿数人を幽す。十二月。雲濱・三樹等三十余人を江戸に檻致す。雲濱は小倉藩邸の獄に在り。幕吏詰めて曰く「汝、尊攘に托して幕府を滅ぼさんと欲す。必ず主使する者あらん」と。雲濱、夷然として曰く「吾、生まれながらにして尊攘の大義を知るのみ。其の他を知らざるなり」と。吏、考訊すること百方。或いは円木の上に坐して膝の上に石を積みしむ。肉裂け骨砕け、体に完膚なきに至るも、終に其の言を易えず。吏、藥を与へて看護し、終に死せざるを獲。明年九月十四日。遂に獄中に瘦死す。年四十四。嗚呼、雲濱は丈夫なるかな。安政中。余、京師に在り、池内氏に寓すること数月にして去る。当時、雲濱の声望、

陶所に及ばざること遠く甚だし。蓋し其の学行の人意に満たざればなり。仮令、雲濱の事なくして死すとも、安政後世の名あるを得んや。今を以て之を言へば、当時の儒流の雲濱と榮を競ひし者は、果して幾人かある。雲濱の学にして此の如し。豈に其の一死を以て国に報ずるに非ざらんや。予、雲濱に於て感あり。明治初。余、柯太の任に辱うし、俄人の侵侮するに遇ふ。苟も予をして彼の地に死せしめば、其の功名は決して雲濱の下には在らじ。予、其の過激に渉るを嫌ひ、甘じて淮陰胯下の態を為す。勝てて歎すべきかな。

# 註

- (1) 嘉永と安政のこと。
- (2) 衆人の頭となる人のこと。
- (3) 拍子木を打って夜回りをすること。
- (4) 心からのぞむこと。
- (5) ここでは家計の意か。
- (6) 質入れして金を借りても、返済できず質流れになること。
- (7) ロシアのこと。
- (8) 山科匡恒。飯泉喜内と親交があり、外交問題などについて意見をかわしていた。安政の大獄に連座し、永押込に処せられた。
- (9) 豊島泰盛。勤王の志厚く、有栖川宮家に仕えるかたわら、諸国の志士と交わった。安政の大獄に連座して捕らえられたが、翌年許された。

(10) 小林良典。代々鷹司家諸大夫の家に生まれる。青蓮院宮・近衛忠熙・三条実万らのもとに出入りするとともに、日下部伊三治・橋本左内らの志士とも交わった。安政の大獄に連座して遠島に処せられ、獄中にて病死した。

(11) 高橋俊璠（としひさ）。代々鷹司家の諸大夫の家に生まれる。条約勅許問題・將軍継嗣問題に際し、志士と結んで主家に入説、策謀する所があつた。特に飯泉喜内・頼三樹三郎と深く交わった。安政の大獄に連座して押込の刑に処せられ、病没。

(12) 若松永福。一条家に仕える。安政の大獄の際、主家の命を受けて幕府有司調伏の折衝に関与したとして、洛中洛外構・江戸払に処せられた。

(13) 春日潜庵。久我家諸大夫として久我通明・建通父子に仕えた。梁川星巖の攘夷実行の意見を建通に紹介し、また將軍継嗣・水戸賜勅などについて梁川星巖や西郷隆盛らと策謀した。京都における尊攘派の中心であつた。

(14) 森寺常安。三条家諸大夫。橋本左内の三条実万への入説を斡旋し、そのため安政の大獄に連座。永押込に処せられた。

(15) 丹羽正庸。三条家の諸大夫を勤める家に生まれる。尊攘派の志士と交わり国事に奔走した。安政の大獄に連座し、中追放に処せられた。

(16) 幕末の尊王攘夷の志士。但馬国出石の医家に生まれ、京都に学んだ。中山忠能の侍読となり、その臣田中家の養子となった。寺田屋事件で捕らえられ、薩摩へ護送される途中に殺害された。

(17) 飯田忠彦。天保の末、有栖川宮宅に仕えて近習となり、熾仁親

王に史書を進講した。また、しばしば封書を奉って幕府の失政を論じ、天下の志士とも交わった。安政の大獄に連座して捕らえられ、百日の押込に処せられた。桜田門外の変で再び嫌疑をかけられ、自刃した。

(18) 梅田雲浜に学び、青蓮院宮（朝彦親王）に仕え、国事に奔走した。安政の大獄に連座して捕らえられ、中追放に処せられた。維新後は明治政府に出仕した。

(19) 三国幽眠。儒学者。鷹司家の儒官となり、尊王攘夷論者として奔走。安政の大獄に連座して捕らえられ、中追放に処せられた。以後も活動を続け、維新时期も活躍した。

(20) 画家。社会風刺を絵画で表現した。また、尊皇攘夷派の志士山本貞一郎らと交わり、国事に奔走した。安政の大獄に連座して所払に処せられた。出獄後、獄中で得た病により没した。

(21) 幕末の儒者。医業のかたわら青蓮院宮・知恩院宮の侍読となり、公家の子弟を教えた。安政年間には、梁川星巖・梅田雲浜らと共に尊皇攘夷論者として知られた。文久三年に暗殺される。

(22) 幕末の志士。庄内藩の郷士の子として生まれる。熱烈な攘夷論者で、真木和泉・平野国臣らと親交があつた。文久三年、幕府の浪士組（後の新撰組）編成に応じ上洛するも、近藤・土方と対立。幕府見廻組の佐々木只三郎に暗殺された。

(23) 名は武直。江戸の易者。清河八郎と会して尊王に志し、大和義挙に際して、その先鋒として活躍した。最後の一戦において捕らえられ、同志一九名と共に処刑された。

(24) 水戸藩士。安政五年、家老となり一橋慶喜擁立運動に参加。ま

た密勅の降下問題の際には、同藩士鶴飼吉左衛門が帯刀に送った密書が幕吏に押さえられ、除奸計画が露見し、安政の大獄の端緒となった。同年切腹に処せられた。

(25) 薩摩の人。安政五年、詔旨を奉じて水戸藩士鶴飼幸吉と共に水戸に下ったが、大獄が起こり捕らえられた。五年、獄中にて病死した。

(26) 後の中川宮。朝彦親王。公武合体派の中心人物の一人。伏見宮邦家親王第四王子で、後に仁孝天皇の養子となった。安政の大獄で一橋派を支持して処罰された。文久期には八月一八日の政変を推進した。

(27) 父鷹司政通とともに開国前後の公武の多難な時期に国政に参与した。禁門の変に際して長州藩に同情をよせ、同藩のために斡旋したが、そのため他人面会・他行禁止などの処分を受けた。一九歳にて没。

(28) (その一) 徳川斉昭の註20に既出。

(29) 安政五年、幕府の日米通商条約勅許を奏請の際、勅答の処理や幕吏の応接にあたったほか、関白九条尚忠の排斥、水戸賜勅の一件に関与した。

(30) 日米通商条約勅許に関する外交処置や横浜鎖港を幕府に督促する問題、大政奉還後の国是を確立する問題など、幕末期における国事の討議・処理にあたった。

(31) 幕府の外交措置問題にたびたび意見を述べた外、和宮降嫁を岩倉具視らと推進。尊攘派の台頭、及び禁門の変での長州擁護により一時雌伏するも、王政復古実現に尽力し復権した。

(32) 江戸後期の彦根藩士。国学者。諸国遊歴の後、近江に高尚館を開き、井伊直弼も入門。井伊が彦根藩主となると、弘道館国学方として召し抱えられた。井伊が大老となった後には、懐刀として辣腕を振るい、安政の大獄に関与した。

(33) 急ぎ走り回って尽力すること。

(34) (その一) 徳川斉昭の註17に既出。

(35) (その一) 徳川斉昭の註18に既出。

(36) 落ち着いて平気な様。

(37) 前漢の高祖劉邦の臣下であった淮陰侯韓信が、若い頃に町の若者との争いを避け、その股の下をくぐったという故事をさす。

### 頼三樹三郎

頼三樹三郎、名醇、字子春。三樹三郎其称。号鴨崖。又号古狂生。頼山陽第三子也。山陽、名襄、字子成、称久太郎。山陽其号。安芸儒官頼惟寛春水之子。年十八。入尾藤二州門。後抵京師下帷二條木屋坊、教育弟子。常歎名教不振、士氣惰頹、以詩文諷世。著日本外史及政記等。讚列聖之盛德、難武將之專横、使大義浸潤人心、举国勤王慷慨。其有功于中興甚大。先没数日、其門人大雅堂義亮至、請画像。画成、乃自題之曰、身偃仰一室、而心関百世之得失、不恤己塩齧、而憂人家国。嗟、是何物迂拙男兒耶。雖然、焉知無念此迂拙者之時乎。其自任之壮、可想也。山陽才学、出于天資。而加之以琢切不厭。嘗曰、謂我才子者、未知我者也。謂我刻苦者、真知我者也。三樹自幼穎悟。山陽殊鍾愛焉。山陽没、為

母所育。年十七。遊浪華、入後藤松陰門。松陰山陽高足弟子也。

明年。抵江戸、入昌平黌、從佐藤一斎学。為人傲慢不羈、好使酒。

嘗賞花于東叡山。見堂宇莊嚴、罵其僭越、手推石燈而倒之。友人留之。乃曰、汝亦党賊乎。拔刀逐之。守門卒來縛之。与錢纔免。

如此者數回。遂為学僚所逐。去遊奥羽・北越、抵松前。詳蝦夷之地形、見海防不修。慨然去帰京。嘗飲于円山、与池内陶所論韓愈藍關詩不合。起唾陶所面。陶所怒將扑之。三樹拔刀邀之。陶所亦拔刀。座客狼狽、或止之纔息。三樹拔刀、亦未嘗傷人。世謂之猫尾。譏其輕佻無為也。及嘉永癸丑、美人來浦賀。幕府措置失当。

乃大唱尊攘、改醉罵之旧習、深沈着実、殆若別人。見諸侯多購糧食、以謂京師之地、常仰他州米穀。一旦緩急、運輸不通。与同志謀、將購粟數万石以備非常。為幕吏沮而止。尋与志士謀、伝攘夷勅于水戸。幕吏惡之、捕下獄。尋檻致江戸。吏屢召之、鞠其狀。三樹曰、背朝旨者謂之賊臣。我承庭訓、志存尊攘。当今之世、不

講尊攘之策者、是国家奸賊・夷狄醜奴也。吾不欲為国賊・醜奴耳。其他毫無与知。言頗激。遂被斬。臨刑殊從容。賦詩曰、

排雲手欲掃妖彗 失脚墮来江戸城 井底痴蛙過憂慮

天辺大月缺光明 身帰鼎鑊家無信 夢斬鯨鯢劍有声

風雨他年苔石面 誰題日本古狂生

是為安政六年己未十月七日。享年三十有五。時棄其屍於小塚原。

大橋訥菴、陰使人葬之。曰、山陽勤王名家。不可使子孫与凡人同。為建一片石。山陽文儒。本無奇節偉行可見。而三樹率直自禍其身。

豈天之使然。以夷山陽之言者乎。山陽自曰、不恤己塩齋、而憂人家国。殊不知家国外無己、己即家国之一分也。今聞山陽子孫無復

恤塩齋者。豈非国家報山陽憂世之德乎。

頼三樹三郎、名は醇、字は子春。三樹三郎は其の称なり。号は鴨崖。又古狂生と号す。頼山陽の第三子なり。山陽、名は襄、字は子成、称は久太郎。山陽は其の号なり。安芸の儒官頼惟寛春水の子なり。年十八。尾藤二州の門に入る。後、京師に抵り、帷を二條木屋坊に下し、弟子を教育す。常に名教の振るはず、士氣の惰類なるを歎じ、詩文を以て世を諷す。『日本外史』及び『政記』等を著はす。列聖の盛徳を讀し、武將の專横を難じ、大義をして人心を浸潤し、国を挙げて勤王慷慨せしむ。其の中興に功あること甚だ大なり。没するに先んずること数日、其の門人大雅堂義亮に至り、画像を請ふ。画成り、乃ち自ら之に題して曰く「身は一室に偃仰すれども、心は百世の得失に関し、己が塩齋を恤まずして、人の家国を憂ふ」「嗟、是れ何物の迂拙男児か。然りと雖も、焉ぞ此の迂拙者を念ふの時なきを知らんや」と。其の自任の壮、想ふべきなり。山陽の才学は、天資に出づ。而も之に加ふるに琢切不厭を以てす。嘗て曰く「我を才子と謂ふ者は、未だ我を知らざる者なり。我を刻苦と謂ふ者は、真に我を知る者なり」と。三樹は幼きより穎悟。山陽、殊に鍾愛す。山陽没し、母の育つる所と為る。年十七。浪華に遊び、後藤松陰の門に入る。松陰は山陽の高足の弟子なり。明年。江戸に抵り、昌平黌に入り、佐藤一斎に従ひて学ぶ。人と為り傲慢にして不羈、好みて使酒す。嘗て花を東叡山に賞す。堂宇の莊嚴なるを見て、其の僭越なるを罵り、手もて石燈を推して之を倒

す。友人、之を留む。乃ち曰く「汝も亦党賊なるか」と。刀を抜きて之を逐ふ。守門の卒、来りて之を縛す。錢を与へて、纒わづかに免る。此の如き者、数回。遂つひに学僚の逐ふ所と為る。去りて奥羽・北越に遊び、松前に抵いたる。蝦夷の地形を詳らかにして、海防の修まらざるを見る。慨然として去りて京に帰る。嘗て円山に飲み、池内陶所と韓愈（二）の「藍関詩」を論じて合はず。起ちて陶所の面に唾す。陶所、怒りて将に之を扑たさんとす。三樹、刀を抜きて之を邀むかふ。陶所も亦刀を抜く。座客狼狽し、或もの之を止め、纒わづかに息やすむ。三樹は刀を抜くも、亦未だ嘗て人を傷つけず。世、之を猫尾と謂ふ。其の輕佻無為なるを譏そるなり。嘉永癸丑（一）に及び、美人、浦賀に来る。幕府の措置、当を失す。乃ち大いに尊攘を唱へ、醉罵の旧習を改め、深沈着実なること、殆ほとんど別人のごとし。諸侯の多く糧食を購ふを見て、以おもて謂いらく「京師の地は常に他州の米穀に仰ぐ。一旦緩急あらば、運輸通ぜず」と。同志と謀りて、将に粟数万石を贖はひて以て非常に備へんとす。幕吏に沮はまれ止めらる。尋つひで志士と謀りて、攘夷の勅を水戸に伝ふ。幕吏、之を惡み、捕へて獄に下す。尋つひで檻こして江戸に致す。吏し屢しばしば之を召し、其の状を鞠くす。三樹曰く「朝旨に背く者は之を賊臣と謂ふ。我、庭訓（二）を承け、志は尊攘に存す。当今の世、尊攘の策を講ぜざる者は、是れ国家の奸賊・夷狄の醜奴なり。吾、国賊・醜奴と為るを欲せざるのみ。其の他は毫も与あづかり知るなし」と。言、頗る激なり。遂つひに斬らる。刑に臨むに殊に従容たり。詩を賦して曰く、

雲を排して手に妖彗を掃はんと欲し  
失脚 墮ち来る 江戸の城  
井底の痴蛙 憂慮に過ぎ  
天辺の大月 光明を缺く  
身は鼎鑊（一）に帰して家に信なく  
夢に鯨鯢を斬りて劍に声あり  
風雨 他年 苔石の面  
誰か題せん 日本の古狂生

是れ安政六年己未十月七日たり。享年三十有五。時に其の屍を小塚原に棄つ。大橋訥菴、陰ひそかに人をして之を葬らしむ。曰く「山陽は勤王の名家なり。子孫をして凡人と同じからしめず」と。為に一片の石を建つ。山陽は文儒なり。本より奇節偉行の見るべきものなし。而れども三樹は率直にして自ら其の身に禍す。豈に天の然らしめんや。以て山陽の言を実する者か。山陽自ら曰く「己が塩齋（一）を恤あはれまずして、人の家国を憂ふ」と。殊に家国の外に己なきを知らず、己は即ち家国の一分なり。今聞くに山陽の子孫に復た塩齋（一）を恤あはれむ者なし。豈に国家の山陽の憂世の徳に報ずるに非ざらんや。

# 註

（一）（その一）梁川星巖の註7に既出。

（二）江戸後期の儒者。山陽の父。大坂で片山北海に学び、北海の主宰した混沌社に加わった。後に広島藩の儒官となる。厳格な朱子

学者で、藩学を朱子学で統一し、寛政異学の禁の先駆となった。

(3) 江戸後期の儒学者。伊予国川之江の廻船業者の家に生まれる。

荻生徂徠の古文辞学などを学んだ後、片山北海に師事し、同門の頼春水、懷徳堂の中井竹山・履軒らと交わった。朱子学に転じた後は、昌平黌の儒官となった。

(4) おこたりくずれること。

(5) 江戸中期の文人画家池大雅の息子。

(6) 寝たり起きたりすること。

(7) ここでは遺体を塩漬けにして醃(ししびしお)にされること。

(8) 非常に愛すること。

(9) 江戸後期の儒者。美濃の人。頼山陽・菱田毅斎らに学ぶ。篠崎小竹の娘婿となり、大坂で教授した。

(10) 江戸後期の儒学者。美濃国岩村藩の家老の家に生まれ、林家の塾頭、昌平黌の儒官などをつとめる。公人としては朱子学を講じてはいたが、個人的信念としては陽明学の信奉者であった。

(11) 中唐の文人。唐宋八大家の一人。柳宗元とともに古文復興に努力した。

(12) 嘉永六年。

(13) 家庭での親の教えのこと。

(14) ここでは釜ゆでの刑に処すための釜をさす。

## 橋本左内

旧幕府末年、内憂外患存臻。而其親藩諸侯、能言開鎖者、莫如

福井藩。由其君信任橋本左内也。左内名綱紀、字伯繼。左内其称。号藝園。福井藩士也。其父長綱、以医為業。左内幼而穎敏好学、及長慷慨沈毅。処事果敢、而接人謙讓。寡言慎行。雖在燕室、必正襟端坐、未嘗曲肱抱膝。而其貌温然、其言藹然、如婦人女子。常慕岳武穆為人、自号景岳。年甫十六。負笈遊浪華、学医於緒方洪庵。十八。繼父職班藩医。藩侯松平慶永、命免医員特擢之、編親衛隊、遊学江戸。弘化・嘉永間。美英諸国、交来乞通商。海内洶洶。而將軍家定多病無嗣。左内慨然欲扶植幕府衰頽、以翼戴皇室、応接外人、不傷国体。時諸藩有志之士、皆属望一橋黃門、相議立為將軍儲貳。左内謂国家大事、宜与衆共謀之。安政四年丁巳夏。輔藩主与薩土諸藩有志、及幕吏川路・永井諸子交結、贊成其議。而水戸・土佐諸公、皆左袒之。独大老井伊直弼欲排羣議、以立紀藩主德川慶福。使閣老堀田正睦入朝請互市。五年。左内受密旨登京。持土藩主山内豊信手書、先謁内大臣三条実万、具說一橋刑部卿慶喜賢明。内府擊節称天下之事尚可為也。往候青蓮院親王上書、遵奉朝旨、扶植幕府。且言諸藩蔑視幕府、密遷廷臣者、皆為売忠獻佞浮薄之徒。時太閤鷹司政通、論建儲貳異見。左内使太閤侍講三國大學說其執事小林筑前守良典。太閤問諸左大臣近衛忠熙。左府曰、是薩摩中将意也。太閤以為然。左内大喜。未幾、廷臣八十八人、連署抗疏、論駁互市。且謂、將軍非得其人不可。正睦不得意而去。直弼擁立家茂為儲貳。七月。家定薨、家茂襲職。直弼彈劾公卿、譴責尾・水・土・越四侯、錮於其家、大捕志士。左内恐累及其君、欲自刃。慶永懇諭之。乃止。十月二十二日夜。幕吏闖入左内家、攫収文書。命禁錮藩邸。六年十月。下獄。獄吏

踢左内仆之序上、乃縛之。斬于伝馬坊獄。左内臨刑、從容端坐受刃。時年二十六。左内状貌白皙、軀幹短小。而志氣甚大。安政三年。新興文武饗。召左内充幹事。左内乃定令、藩士年自十五以上至四十、皆就學。革軍政、購汽艦、造砲銃、製硝藥、鑿石炭。諸政之未張者悉振刷焉。多所裨益。先是藩學者、率出山崎門、高談性命、無益實用。至是學風一新。左内嘗曰、洋學宜興。善興也其利甚多。不善興也其害不可勝言。則其多所取捨。亦可知矣。當訊鞠時、縷述無隱。幕吏語氣、及回護其主、則有感喜色。然至於尊王佐幕大節係藩主者、則昂然軒眉吐實、不欲使君陷於不義而苟免也。如水・尾諸藩臣得罪一己。曰、出臣等私意。頗有孤忠可憫之狀。而左内則謂不若使仗大義獲罪也。在獄賦詩見志曰、

二十六年如夢過 顧思平昔感滋多 天祥大節嘗心折

### 土室猶吟正氣歌

其人氣象可想也已。川路聖謨嘗語人曰、昨晤橋本生、其言論剴當、吾半身殆為截取。吾閱人多矣、未見如生者。武田耕雲齋与左内一見如旧。歎曰、東湖死後、復有東湖。西鄉隆盛常曰、吾於先輩服藤田東湖、於同儕推橋本左内。二子才學器識、非吾輩所及也。其為名士所推服如此。幕吏無狀、專挾猜疑之心、敢果誅殺、不顧玉石俱焚。其斃左内者、所以斃幕府也。坂谷朗廬以為自裂其肺腑。信矣。

旧幕府末年、内憂外患、存に臻る。而して其の親藩諸侯の能く開鎖を言ふ者は、福井藩に如くはなし。其の君の橋本左内を信任せしに由るなり。左内、名は綱紀、字は伯繼。左内は其の称。

藜園と号す。福井藩士なり。其の父の長綱は医を以て業と為す。左内、幼くして穎敏（一）にして學を好み、長ずるに及びて慷慨沈毅たり。事に処するに果敢、人に接するに謙讓。寡言慎行たり。燕室（二）に在りと雖も、必ず襟を正して端坐し、未だ嘗て肱を曲げて膝を抱かず。而るに其の貌は温然、其の言は藹然（三）として、婦人女子の如し。常に岳武穆（四）の人と為りを慕ひ、自ら景岳と号す。年甫十六。負笈（五）して浪華に遊び、医を緒方洪庵（六）に學ぶ。十八。父の職を継ぎ藩医に班す。藩侯松平慶永、命じて医員を免じて特に之を擢（七）でて、親衛隊を編し、江戸に遊學せしむ。弘化・嘉永の間。美英諸国、交（八）も来りて通商を乞ふ。海内洵洵たり。而るに將軍家定は病多くして嗣なし。左内、慨然として幕府の衰頹を扶植し、以て皇室を翼戴し、外人を応接し、国体を傷はざらんと欲す。時に諸藩の有志の士、皆、一橋黄門を属望し、相議して立てて將軍の儲貳（九）と為さんとす。左内、謂（一〇）らく「国家の大事なれば、宜しく衆と共に之を謀るべし」と。安政四年丁巳夏。藩主を輔けて薩土諸藩の有志、及び幕吏の川路（一一）・永井（一二）諸子と交結せしめ、其の議に賛成す。而して水戸・土佐の諸公、皆之に左袒（一三）す。独り大老井伊直弼のみ羣議を排け、以て紀藩主徳川慶福を立てんと欲す。閣老堀田正睦（一四）をして朝に入り互市（一五）するを請はしむ。五年。左内、密旨を受けて京に登る。土藩主山内豊信（一六）の手書を持して、先づ内大臣三条実万（一七）に謁し、具さに一橋刑部卿慶喜の賢明なるを説く。内府、擊節（一八）して天下の事尚ほ為すべしと称す。往きて青蓮院親王を候（一九）ひて上書し、朝旨を遵奉し、幕府を扶植せしむ。且つ諸藩は幕府を

蔑視し、密に廷臣に運ちかづく者は、皆、忠を売り倭を献ずる浮薄の徒なりと言ふ。時に太閤鷹司政通二、儲貳を建つるを論ずるに異見あり。左内、太閤の侍講三國大学をして、其の執事小林筑前守良典に説かしむ。太閤、諸これを左大臣近衛忠熙ただひろに問ふ。左府曰く「是れ薩摩中将の意なり」と。太閤以て然りと為す。左内、大いに喜ぶ。未だ幾いくばくならずして、廷臣八十八人、連署して抗疏一し、互市するを論駁す。且つ謂ふ「將軍は其の人を得るに非ずんば不可なり」と。正睦、意を得ずして去る。直弼、家茂いえもちを擁立して儲貳と為す。七月。家定薨じ、家茂、職を襲ふ。直弼、公卿を弾劾し、尾・水・土・越の四侯を譴責一し、其の家に鎗し、大いに志士を捕へしむ。左内、累の其の君に及ばんことを恐れ、自刃せんと欲す。慶永、之を懇諭す。乃ち止む。十月二十二日夜。幕吏、左内の家に闖入二し、文書を攫り収む。命じて藩邸に禁錮せしむ。六年十月。獄に下す。獄吏、左内を踢りて之を庁上に仆し、乃ち之を縛る。伝馬坊の獄に斬る。左内、刑に臨み、従容として端坐し刃を受く。時に年二十六。左内、状貌白哲はくせきにして、軀幹短小。而れども志氣甚大なり。安政三年。新たに文武饗を興す。左内を召して幹事に充つ。左内乃ち令を定め、藩士の年十五より以上、四十に至るまで、皆學に就かしむ。軍政を革あらため、汽艦を購あがなひ、砲銃を造り、硝薬を製つくり、石炭を鑿うがたしむ。諸政の未だ張らざる者、悉ことごとく振刷二す。裨益二する所多し。是より先、藩の学者、率おほむね山崎の門二より出で、性命を高談し、実用に益なし。是に至りて學風一新す。左内嘗て曰く「洋學は宜しく興すべし。善く興せば其の利甚だ多し。善く

興さざれば其の害勝げて言ふべからず。則ち其の取捨する所多し。亦知るべし」と。訊鞠の時に當りては、縷述二して隠すなし。幕吏の語氣、其の主を回護するに及びて、則ち感喜の色あり。然れども尊王佐幕の大節の藩主に係る者に至りては、則ち昂然二として軒眉一して実を吐き、君をして不義に陥れて、苟いやくも免れしむるを欲せざるなり。水・尾の諸藩の臣の如きは、罪を帰するに一へに己にす。曰く「臣等の私意に出づ」と。頗る孤忠の憫あはれむべきの状あり。而れども左内は則ち謂おもらく「大義に仗りて罪を獲しむるにしかず」と。獄に在りて詩を賦し、志を見して曰く、

二十六年 夢の如く過ぐ

平昔を顧み思ふに 感ます滋ますます多し

天祥二の大節 嘗て心折る

土室二 猶ほ正氣の歌二を吟ず

其の人の氣象、想ふべきのみ。川路聖謨としあきら、嘗て人に語りて曰く「昨、橋本生に晤あふに、其の言論剴當二し、吾が半身は殆ど截せつ取しせらる。吾、人を関すること多きも、未だ生の如き者を見ず」と。武田耕雲斎は左内と一たび見えて旧の如し。歎じて曰く「東湖の死後、復た東湖あり」と。西郷隆盛は常に曰く「吾、先輩に於ては藤田東湖に服し、同儕せいに於ては橋本左内を推す。二子の才學器識、吾輩の及ぶ所に非ざるなり」と。其の名士の推服する所と為ること此の如し。幕吏、状なくして、専ら猜疑の心



を挟みて、敢果に誅殺し、玉石の俱に焚かるるを顧みず。其の左内を斃<sup>たお</sup>すは、幕府を斃<sup>たお</sup>す所以なり。坂<sup>さか</sup>・谷<sup>たに</sup>・朗<sup>ろう</sup>・廬<sup>ろ</sup>は以て自ら其の肺腑を裂くと為す。信なり。

—註—

- (1) 才知がすぐれて賢いこと。
- (2) 居間、くつろぐ部屋。
- (3) 盛んなさま。
- (4) 南宋の忠臣岳飛のこと。しばしば金軍を破って国家に尽くしたが、平和論者の秦檜に反対し殺害された。
- (5) 本箱を背負って遠くの地へ勉学に出ること。
- (6) 江戸末期の蘭方医。大坂に適適齋塾を開き、箕作秋坪・大鳥圭介・福沢諭吉・橋本左内・大村益次郎など数多くの人材を育てた。翻訳・著書も多数残している。
- (7) 世継ぎのこと。
- (8) その(一) 佐久間象山の註10に既出。
- (9) 永井尚志。老中阿部正弘に抜擢され、嘉永・安政年間是要職を歴任。安政五年には外国奉行として通商条約を結ぶ。翌六年、安政の大獄に連座し免職された。後、長州征伐や戊辰戦争などの処理にあたった。
- (10) 同意すること。
- (11) 外国と貿易をすること。
- (12) (その一) 徳川公斉昭の註27に既出。
- (13) 拍子をとるいと。

(14) 鷹司輔政の父。幕末期、鎖国説が優勢の朝廷内にあって一人開国説を固持し幕府を支持した。しかし三國大学・小林良典の直諫により鎖国説に豹変し、逆に鎖国説から開国説へと転じた九条尚忠と対立。また、將軍継嗣問題でも一橋派となった。このため安政の大獄の際は謹慎処分となっている。

- (15) 強い意見書を天子に奉って直言すること。
- (16) 責めとがめること。
- (17) 許しを得ずみだりに入ること。
- (18) 悪い点をすつかりはらって新しくすること。
- (19) 補い役立つ、助けとなること。
- (20) 江戸前期の儒学者山崎闇斎を祖とする、程朱学を核とした学統をさす。
- (21) くわしく述べること。
- (22) 意気盛んなさま。
- (23) 眉をあげること。
- (24) 南宋末の忠臣。号は文山。元軍に捕らえられ帰順を求められたが、節を屈せず殺された。
- (25) 文天祥が捕らえられていた牢獄をさす。
- (26) 文天祥が牢獄の中で詠んだ五言古詩。『孟子』の「浩然の氣」に基づき、古来の忠臣烈士の事跡を詠ったもの。藤田東湖・吉田松陰らがこれに和して詩を詠んでいる。
- (27) ぴったりとあてはまること。
- (28) 切り取られること。
- (29) 幕末維新期の儒学者で、明六社最年長の同人。大塩平八郎の洗

心洞で学んだ後、昌平黌教授古賀洞庵の久敬舎に学ぶ。嘉永六年、岡山に設立された興讓館の督学に迎えられた。維新後は下級官吏として出仕した。

### 吉田松蔭

長人維新之勲、与薩藩争美。而開鎖之論、紛紛聚訟、内訌不息。其大節起于微賤之士、而成乎微賤之士。蓋其藩祖以来尊攘余風、使之然也。然而其志操凜然能為後進領袖者、推吉田松蔭為巨擘。松蔭名矩方、字義卿、称寅次郎。松蔭其号。又号二十一回猛士。父曰常道。杉氏。其祖出吉田氏。吉田氏世為長門藩兵法師員。無子。故以松蔭為嗣。松蔭為人短小、面点痘痕。目光爛然、以名節自勵。深沈有大志。或謂常道曰、高麗人評豐公、眼光射人、不可偏視。令息眼光類豐公。至誠接物不欺。雖豐公不如。然其不如豐公者、亦在此乎。年甫十一。藩主召之、命講武教全書。聞之歎曰、矩方講兵、使七書与六經争光。遂為其弟子。弘化初。山田賴毅、自關東歸、謂松蔭曰、吾察世運、轉變非遠。今子專攻詩書、徒過歲月。可惜。盍大開豁眼見宇内形勢。松蔭深感其言、始誦洋籍。又聞山田公章勸為北条時宗・豐臣秀吉。答曰、是非某所及。而若義律・伯麦・馬里遜則小才已。不足畏也。嘉永二年己酉四月。率門人講武萩城東羽賀台。遊鎮西如平戸。訪葉山左内鎧軒。蓋其平生所欽慕。五閱月而歸。三年。從藩主抵江戶、巡視相・房海岸。慨然曰、江戶灣嚴浦賀防衛、則可以禦外寇。唯東北沿海一帶、殆与開門無異。可乎。彼地西連滿州、北連俄羅斯。

經国大業所關。宜先察其形勢、以講防禦之策。与肥後藩士宮部鼎藏約、將漫遊東北。鼎藏亦奇士也。会藩主帰国、邸吏不給関符。松蔭重違約、不告而發。会於常陸、自奥羽過北越、航佐渡。旬歲還。邸吏論法捕之。追還其国。命屏居。六年。美艦入浦賀。海内囂然鼎沸。藩主特赦松蔭、使遊學四方。松蔭乃抵江戶、著書大唱攘夷。聞信濃国松代藩士佐久間象山為人桀、往訪之。一見如旧。遂為其弟子。象山為說歐美事情綦詳。且曰、男兒須歷遊海外万里、觀察其国形勢、以講攻守之策也。松蔭感憤、一意規圖外航。聞俄艦入長崎、辞象山而行。則俄人既去矣。失望殊甚。遂訪鼎藏於肥後。与俱復赴江戶。安政元年甲寅正月。美艦五艘、碇泊小柴洋。進抵羽田。跋扈殊甚。幕府設賓館于橫浜饗之。志士攘臂憤之。松蔭欲刺美將。鼎藏止之。三月。美艦又来泊下田。松蔭乃欲駕美艦航外国。象山為之經画百方。松蔭挈其門生金子重輔間行抵下田。重輔者毛利氏小臣也。有才氣而放蕩不羈。既而自新講學。一日聞永島三平所論、大有所感。三平松蔭門人也。遂知松蔭有海外志、欲与之俱。追踪不及。後見松蔭于江戶。松蔭曰、離地斯無人、離人斯無事。子苟欲究人事、不若觀地理。重輔感服、欲成前志。恐犯国禁累藩侯、出邸亡命。變姓名曰渋木松太郎。至是二人相議、更變姓名、曰瓜生万二・市木公太。傍徨十余日、遇一美人托書牘。有言、生等欲周遊五大洲。願得假坐貴艦中。百般使役、惟命是聽。吾国海禁未除。此事或伝播、則勿斬立至。恐傷貴大臣仁厚之意。願許所請。委曲包隱、至他年自帰、則国人亦不必追窮往事也。二十七日夜。馳一漁舟、窃詣美艦傍。仰視其大如壑。舟誤入艦梯下。漂蕩殆覆。松蔭咄嗟、直上艦梯。重輔倉皇、攀梯乘艦。遂見美人、

請載去。美人新与我修好、恐違約不敢聽。諭二人速歸。翌日具狀告幕吏。幕吏素嫉象山、謂二人所為出象山慫慂。遂捕三人繫獄。幕吏見松蔭、詰其出象山指揮。松蔭正色曰、寅次郎決非借他人智力者也。吾知国有嚴禁、甘心為之。事成則上供天朝之用、下報藩主之恩。不成則服斷頭車裂之刑。如此而已。旁人聞之、莫不咋舌。既而象山被赦。長藩請二人檻致本国。重輔憤慨殊甚。請見父母然後死。藩侯憐而赦之。未幾果死。年二十五。松蔭在獄。閱歲。被處私家禁錮。尋開松下塾。藩士慕風、來學者日衆。既見赦。藩侯見其所著狂夫之言、大喜。命更上言其所見。松蔭感奮、益思報効。会幕府矯朝旨与美人約開五港、志在大憤。說廷臣上討幕議。五年五月。閣老間部詮勝、奉命上京。收捕党人。松蔭聞之大憤激。著時勢論一篇、使門人在京者呈諸大原宰相。其大意、在合草莽志士、兼論諸藩以画中興之業。其言稍漏。三位不敢以聞。十月。長井雅樂、自江戸歸。說者曰、雅樂恐藩主得譴于幕府、勸東觀行賄免難。又曰、水戸諸藩壯士、謀刺大老井伊直弼。雅樂為不知者逃去。松蔭憤激殊甚。極言東觀之失。將入京刺詮勝。遂率義兵招門人諸友、得十七人。作同盟書、窃告之有司。有司畏幕府、再伝命繫獄。松蔭大怒曰、雖死不得從命。門人等亦就有司問罪狀。無敢答者。先是父常道罹疾。至是漸篤。松蔭仰天号泣。更与有司巽言曰、請得緩數日看護。乃見赦。居家侍父、湯藥旬余。父病少間。因会親戚門生酌酒、泣告別赴獄。常道欣然举頭曰、往哉。勿患身屈一時。務揚名於萬世。庸何傷焉。明年。幕府起大獄捕志士。伝命檻致松蔭於江戸。松蔭之東也、幕府頗疑長藩。而松蔭常与周布翼・長井雅樂議不相合。松蔭罵之不少假借。於是人或恐其興大獄。松蔭聞

之於邑曰、不我知也哉。我以公議罵翼等、翼等恐我過激誤事。故投我於獄、以保護之耳。吾豈不之知邪。吾不能以至誠服幕吏。使悔過改圖、寧嫁禍他人以釀國家之害乎。我罵人為不忠不孝、亦已甚矣。豈不能以一身當國家之難哉。因淚下數行。作歌曰、

嗚呼孤臣此行万人觀 生豈容易死亦難

既至、吏詰之曰、聞汝向獻匿名書于朝、謀滅幕府。且与梅田雲濱会於長州、密画陰謀。信乎。松蔭笑曰、吾何知之。上書匿名、丈夫所不屑。吾何為斯卑劣乎。梅田氏之來我國也、吾既繫獄。吾安得与之謀。公等所問、絕無其實。唯我向疾幕府專橫、上時勢論于大原卿、又謀刺間部詮勝。我唯有此二罪耳。丈夫言誓神明、毫無欺誣。從容無畏憚色。幕吏見之大服其壯烈。遂斬諸小塚原。是為六年十月二十七日。松蔭死時、年二十有九。有絕命歌曰、

親袁思不心爾勝流親心今日能消息何登聞久良牟

嗚呼、松蔭慷慨憂國、遂死于幕吏毒手。可歎也已。然其鼓舞二州志氣、以基維新之運者、全在於此。所以從容就死也歟。其論東北沿海防禦、為經國急務、尤見着眼之高也。其介松浦竹四郎于阪本鼎齋書。称此人足跡徧乎天下、尤精蝦夷事。近藤重藏以來一人。其愛才有容、亦可以想見矣。文久初。余始識竹四郎、得聞蝦夷之說。而不能服其人。及維新俱官開拓、同升於朝。竹四郎常爭小事、怒見于面。余曲意從之而已。當時朝廷、有若三条・岩倉二公。無復松蔭輩豪傑能輔其志者。余承乏柯太全權、窃期有為、而不能積誠動人。遂致上表辭職。止保一身。可勝慨哉。

長人、維新の勲、薩藩と美を争ふ。而して開鎖の論、紛紛聚訟、

内<sup>ない</sup>証<sup>こう</sup>として息まず。其の大節は微賤の士より起り、微賤の士に成る。蓋し其れ藩祖以来の尊攘の余風<sup>い</sup>、之を然らしむるなり。然れども其の志操、凜然<sup>い</sup>として能く後進の領袖と為る者は、吉田松蔭を推して巨<sup>き</sup>擘<sup>は</sup>と為す。松蔭、名は矩<sup>のり</sup>方<sup>かた</sup>、字は義卿、称は寅次郎。松蔭は其の号。又、二十一回猛士と号す。父は常道と曰ふ。杉氏。其の祖は吉田氏より出づ。吉田氏は世よ長門藩の兵法の師員たり。子なし。故に松蔭を以て嗣と為す。松蔭は人と為り短小にして、面、痘<sup>とう</sup>痕<sup>こん</sup>を点す。目光爛然として、名節を以て自ら励ます。深沈<sup>い</sup>として大志あり。或ひと常道に謂ひて曰く「高麗人、豊公を評して、眼光、人を射し、偏<sup>せま</sup>りて視るべからず。令息の眼光は豊公に類す。至誠は物に接して、欺<sup>あざむ</sup>かず。豊公と雖も如かず。然れども其の豊公に如かざる者は、亦た此に在るか」と。年甫十一。藩主之を召し、命じて『武教全書』を講ぜしむ。之を聞きて歎じて曰く「矩方、兵を講ずれば、七書<sup>い</sup>をして六経と光を争はしむ」と。遂<sup>つひ</sup>に其の弟子と為る。弘化初。山田頼毅<sup>よりたけ</sup>、関東より帰り、松蔭に謂ひて曰く「吾、世運を察するに、転変すること遠くに非ず。今、子、詩書を専攻して、徒らに歳月を過ぐす。惜しむべし。盍<sup>いかん</sup>ぞ大<sup>だい</sup>開<sup>かい</sup>豁<sup>かつ</sup>眼<sup>がん</sup>として、宇内<sup>い</sup>の形勢を見ざる」と。松蔭、深く其の言に感じ、始めて洋籍を読む。又、山田公章<sup>い</sup>の北条時宗・豊臣秀吉と為らんことを勧むと聞く。答へて曰く「是<sup>それ</sup>れ某<sup>がし</sup>の及ぶ所に非ず。而れども義<sup>エリオット</sup>・律<sup>ト</sup>・伯<sup>ブレマ</sup>・麦<sup>マ</sup>・馬<sup>マリ</sup>里<sup>リ</sup>遜<sup>ン</sup>」のごときは則ち小才なるのみ。畏るるに足らざるなり」と。嘉永二年己酉四月。門人を率いて武萩城の東の羽賀台に講ず。鎮西に遊びて平戸に如く。葉山左内

鑑軒<sup>い</sup>を訪ぬ。蓋し其の平生欽慕せし所なり。五閏月にして帰る。三年。藩主の江戸に抵<sup>いた</sup>るに従ひて、相・房の海岸を巡視す。慨然として曰く「江戸湾は浦賀の防衛を蔽にすれば、則ち以て外寇を禦すべし。唯だ東北沿海一帯は、殆<sup>ほとん</sup>ど門を開くと異なるなし。可なるか。彼の地は西は満州に連なり、北は俄羅斯に連なる。経国の大業の関する所なり。宜しく先づ其の形勢を察し、以て防禦の策を講ずべし」と。肥後藩士宮部鼎蔵と約して、将に東北を漫遊せんとす。鼎蔵も亦奇士なり。藩主の国に帰るに会し、邸吏、関符を給せず。松蔭、重ねて約に違ひ、告げずして発す。常陸に会し、奥羽より北越を過ぎ、佐渡に航す。旬歳<sup>い</sup>にして還る。邸吏、法を論じて之を捕ふ。其の国に追還す。屏居を命ぜらる。六年。美艦、浦賀に入る。海内翕<sup>ごう</sup>然<sup>ぜん</sup>として鼎沸す。藩主、松蔭を特赦し、四方に遊学せしむ。松蔭乃ち江戸に抵<sup>いた</sup>り、書を著して大いに攘夷を唱ふ。信濃国松代藩士佐久間象山の人为り桀なるを聞き、往きて之を訪ぬ。一見して旧の如し。遂<sup>つひ</sup>に其の弟子と為る。象山、為に欧美の事情を説くに綦詳<sup>い</sup>なり。且つ曰く「男児、須く海外万里を歴遊して、其の国の形勢を観察し、以て攻守の策を講ずべきなり」と。松蔭感憤し、一<sup>ひと</sup>に外航を規図せんと意<sup>おも</sup>ふ。俄艦の長崎に入るを聞き、象山を辞して行く。則ち俄人は既に去る。失望すること殊に甚だし。遂<sup>つひ</sup>に鼎蔵を肥後に訪ぬ。与に俱に復た江戸に赴く。安政元年甲寅正月。美艦五艘、小柴洋に碇泊す。進みて羽田に抵<sup>いた</sup>る。跋扈すること殊に甚だし。幕府、賓館を横浜に設けて之に饗す。志士、臂を攘ひて之を憤る。松蔭、美將を刺さんと欲す。鼎蔵、之を止<sup>とど</sup>む。

三月。美艦、又來りて下田に泊す。松蔭乃ち美艦に駕して外国に航せんと欲す。象山、之が為に画を百方に経す。松蔭、其の門生金子重輔を挈ひきげて間行して下田に抵いたる。重輔は毛利氏の小臣なり。才氣ありて放蕩不羈。既にして自ら新たに学を講ず。一日、永島三平の論ずる所を聞き、大いに感ずる所あり。三平は松蔭の門人なり。遂つひに松蔭に海外の志あるを知り、之と俱にせんと欲す。追つい踪しょう（11）するも及ばず。後、松蔭に江戸に見ゆ。松蔭曰く「地を離るれば斯れ人なく、人を離るれば斯れ事なし。子、苟いやくも人事を究めんと欲すれば、地理を觀るにしかず」と。重輔、感服し、前志を成さんと欲す。国禁を犯して藩侯を累わづはすを恐れ、邸を出でて亡命す。姓名を変じて渋木松太郎と曰ふ。是に至りて二人相議し、更に姓名を変じて、瓜生万二・市木公太と曰ふ。傍徨すること十余日、一美人に遇ひて書牘を托す。言あり。「生等、五大洲を周遊せんと欲す。願はくは仮の坐を貴艦中に得られんことを。百般の使役、惟れ命ずれば是れ聴かん。吾が国の海禁、未だ除かれず。此の事或は伝播すれば、則ち勿斬立ちどころに至らん。恐らくは貴大臣の仁厚の意を傷つけん。願はくは請ふ所を許せ。委曲（12）包み隠して、他年自ずから帰るに至れば、則ち国人も亦必ずしも往事を追窮せざらん」と。二十七日夜、一漁舟を馳せて、窃ひそに美艦の傍に詣いたる。其の大なること壑たにの如きを仰ぎ視る。舟誤りて艦の梯の下に入る。漂蕩（13）して殆ど覆す。松蔭、咄嗟にして、直ただちに艦の梯を上る。重輔も倉皇（14）して、梯を攀よじりて艦に乗る。遂つひに美人に見え、載りて去かんことを請ふ。美人、新たに我と修好し、約に違ふを恐れて、敢て

聴かず。二人を諭して速やかに帰らしむ。翌日、具さに状を幕吏に告ぐ。幕吏素より象山を嫉そねみ、謂おもらく「二人の為す所は象山の怨しやう、憑よう（15）より出ん」と。遂つひに三人を捕へて獄に繋ぐ。幕吏、松蔭を見、其の象山の指揮に出づるを詰す。松蔭、色を正して曰く「寅次郎、決して他人の智力を借りる者に非ざるなり。吾、国に嚴禁あるを知るも、甘心もて之を為す。事成らば則ち上は天朝の用に供し、下は藩主の恩に報じん。成らざれば則ち断頭車裂の刑に服さん。此の如きのみ」と。旁人之を聞き、咋舌（16）せざるはなし。既にして象山赦さる。長藩、二人を請ひて本国に檻致す。重輔、憤慨すること殊に甚だし。父母に見えて然る後に死せんと請ふ。藩侯、憐みて之を赦す。未だ幾いくならずして果して死す。年二十五。松蔭、獄に在り。歳を閱す。私家禁錮に処せらる。尋つひで松下塾を開く。藩士、風を慕ひ、来学する者日々衆し。既にして赦さる。藩侯、其の著せし所の『狂夫之言』を見、大いに喜ぶ。命じて更に其の見し所を上言せしむ。松蔭感奮し、益ます効に報いんと思ふ。幕府の朝旨を矯めて美人と五港を開くを約するに会し、志、大いに憤するに在り。廷臣に説きて討幕の議を上す。五年五月。閣老間部詮勝、命を奉じて京に上る。党人を収捕す。松蔭、之を聞きて大いに憤激す。『時勢論』一篇を著はし、門人の京に在る者をして、諸これを大原宰相に呈せしむ。其の大意は、草莽の志士を合し、兼ねて諸藩を論すに中興の業を画するを以てするに在り。其の言、稍漏る。三位、敢て以て聞かず。十月。長井雅楽（17）、江戸より帰る。説く者曰く「雅楽は藩主の譴（18）を幕府に得るを恐れて、東觀（19）して賄を行ひて難を

免るるを勸む」と。又曰く「水戸諸藩の壮士、大老井伊直弼を刺さんと謀る。雅楽は知らずと為して逃げ去る」と。松蔭、憤激すること殊に甚だし。東觀の失を極言す。將に京に入りて詮勝を刺さんとす。遂に義兵を挙げて門人諸友を招き、十七人を得。同盟書を作り、窃に之を有司に告ぐ。有司、幕府を畏れ、再び命を伝えて獄に繋ぐ。松蔭大いに怒りて曰く「死すと雖も命に従ふを得ず」と。門人等も亦有司に就きて罪状を問はる。敢て答ふる者なし。是より先、父常道、疾に罹る。是に至りて漸く篤し。松蔭、天を仰いで号泣す。更に有司に異言を与へて曰く「請ふ、緩くして数日の看護を得んことを」と。乃ち赦さる。家に居りて父に侍り、湯藥すること旬余。父の病少しく間す。因りて親戚門生に会し酒を酌み、泣きて別れを告げて獄に赴く。常道欣然として頭を挙げて曰く「往くかな。身を患へて一時に屈すること勿れ。名を萬世に揚ぐるに務めよ。庸何んぞ焉に傷はれんや」と。明年、幕府、大獄を起して志士を捕ふ。命を伝へて松蔭を江戸に檻致せしむ。松蔭の東するや、幕府頗る長藩を疑ふ。而れども松蔭は常に周布翼・長井雅楽と議して相合せず。松蔭、之を罵りて少しも仮借せず。是に於て、人或は其の大獄を興すを恐る。松蔭、之を邑に聞きて曰く「我を知らざるかな。我、公議を以て翼等を罵り、翼等、我の過激にして事を誤るを恐る。故に我を獄に投じて、以て之を保護せしのみ。吾、豈に之を知らざらんや。吾、至誠を以て幕吏に服するあたはず。過ちを悔い図を改めしめて、寧ぞ禍を他人に嫁して以て国家の害を醸さんや。我、人を罵りて不忠不孝と為すも、亦已に甚だし。豈に一

身を以て国家の難に当るあたはざらんや」と。因りて涙数行下る。歌を作りて曰く、

嗚呼 孤臣 此れ万人の觀を行ふ

生 豈に容易ならんや 死 亦 難し

既に至り、吏、之を詰して曰く「聞く、汝向に匿名の書を朝に献じ、幕府を滅ぼさんと謀る。且つ梅田雲濱と長州に会し、密に陰謀を画す、と。信なるか」と。松蔭笑ひて曰く「吾何ぞ之を知らんや。書を上るに名を匿すは、丈夫の屑とせざる所なり。吾、何ぞ斯の卑劣を為さんや。梅田氏の我が国に来るや、吾既に獄に繋がる。吾安ぞ之と謀るを得んや。公等の問ふ所は、絶へて其の実なし。唯だ我向に幕府の専横を疾み、『時勢論』を大原卿に上り、又、間部詮勝を刺さんと謀るのみ。我唯だ此の二罪あるのみ。丈夫の言は神明に誓ひて、毫も欺誣することなし」と。従容として畏れ憚る色なし。幕吏、之を見て大いに其の壮烈なるに服す。遂に諸を小塚原に斬る。是れ六年十月二十七日たり。松蔭、死するの時、年二十有九。絶命歌ありて曰く、

親思ふ 心に勝る 親心 今日の消息 何と聞くらん

嗚呼、松蔭、慷慨して国を憂ひ、遂に幕吏の毒手に死す。歎くべきのみ。然れども其の二州の志気を鼓舞し、以て維新の運を基づけたるは、全く此に在り。従容として死に就く所以なるか。其

の東北沿海の防禦を論じ、経国の急務と為すは、尤も着眼の高きを見る。其れ松浦竹四郎(27)を介して阪本鼎斎よりの書に、「此の人の足跡は天下に<sup>あまね</sup>徧<sup>あまね</sup>きも、尤も蝦夷の事に精なり。近藤重蔵(28)以来の一人なり」と称す。其の才の容あるを愛すること、亦以て想ひ見るべし。文久初。余始めて竹四郎を識り、得て蝦夷の説を聞く。而れども其の人に服すあたはず。維新に及びて俱に開拓に官し、<sup>とも</sup>同に朝に升る。竹四郎、常に小事を争ひ、怒り面に見<sup>あ</sup>はる。余、意を曲げて之に従ふのみ。当時の朝廷、三条・岩倉の二公のごときあり。復た松蔭の輩(29)の豪傑の能く其の志を輔<sup>たす</sup>くる者なし。余、柯太の全権を承乏(30)し、<sup>ひそ</sup>窃<sup>そ</sup>に為すところあらんと期すも、而れども積誠もて人を動かすあたはず。遂<sup>つひ</sup>に辞職を上表するに致る。一身を保するに止まる。勝てて慨すべきかな。

—註—

- (1) うちわめめすること。
- (2) 安土桃山時代の武将であつた毛利輝元が豊臣政権のもと、文禄の役(朝鮮出兵)に参加した事実を言つたものか。
- (3) りりしいこと。
- (4) 静かで奥深いさま。
- (5) 『六韜』『孫子』『呉子』『司馬法』『黄石公三略』『尉繚子』『李衛公問对』の七兵法書。
- (6) 山田宇右衛門。幕末の長州藩の政治家。尊皇攘夷運動に参画し、木戸孝允らと藩政刷新に尽くした。

- (7) 大きく目を見開くこと。
- (8) 天下のこと。
- (9) 山田亦介。長州藩士。吉田松陰の養父大介の親友であり、松陰の長沼流兵学の師でもあつた。
- (10) エリオット・プレマの二人はアヘン戦争の時のイギリス艦隊の司令官。マリソンについては未詳。
- (11) 肥前平戸藩の家老。山鹿流兵学者・陽明学者。佐藤一斎に学んだ。
- (12) まる一年。
- (13) 集めていて詳しいこと。
- (14) 後を追いかけること。
- (15) 詳しい部分。
- (16) ただよい流れること。
- (17) あわてるさま。
- (18) 勧めること。
- (19) 後悔したり驚いたりして舌をかむこと。
- (20) 幕末長州藩の政治家。公武合体と海外進出、積極的開国策のいわゆる航海遠略策を建言し、一時期長州藩の藩論となつた。しかし、藩内改革派や久坂玄瑞ら尊攘派の反対に会い、免職となり切腹を命じられた。
- (21) 責め、咎め。
- (22) 観は見えること。東観は江戸の將軍に見えること。
- (23) 巽与之言に同じ。へりくだつてうやうやしく、慎み深く人に逆らわない言葉のこと。

(24) 周布政之助。翼は諱の兼翼からとつたもの。幕末長州藩の政治家。攘夷論者ではあったが、久坂らの急進的な意見とは一線を画していた。下関戦争の後、藩論が一変し孤立。蛤御門の変で敗れ、久坂らが戦死した際、責任をとって自殺した。

(25) ここでは、許す、見のがすの意。

(26) あざむくこと。

(27) 北方探検家。伊勢の郷士の三男として生まれる。諸国を遊歴中、ロシアの南下による北方の危機を聞き、蝦夷地探検を開始した。

樺太・国後・択捉にまで至った。多くの著作を残している。

(28) 近藤守重。江戸後期の幕吏、北地探検家。寛政一〇年、幕府蝦夷地調査隊に加わり、択捉島に渡り、「大日本恵登呂府」の標柱を建てる。以後、文化五年、松前奉行付出役から書物奉行に転出するまで蝦夷地に関係し、千島方面を探検。択捉への渡航路や同島の漁場開設などを指揮し、千島開拓の基礎を築いた。

(29) 木戸孝允・伊藤博文・山県有朋・井上馨らを指すか。

(30) 適当な人物がいないので間に合わせにその職に就く意で、自分が官職につくことをへりくだって言ったもの。

## 金子孫二郎

井伊直弼争建儲主開港。自為徳川氏一代大事機。遂至擅殺志士。而忽為金子孫次郎等所刺。若天討之者。豈非人心不可違乎。孫次郎、名教孝。水戸藩士川瀬七郎右衛門教徳二子也。出冒金子氏。初水戸侯中納言徳川斉修無子、有弟斉昭。執政等、或謀迎立將軍

公子。孫次与同志力争心權、遂立斉昭。天保中。為歩目附。時藩有二党。一曰正、一曰姦。孫次与武田正生上書助正党。後自吟味役経奥右筆、進郡奉行。弘化三年丙午。斉昭權讒得譴、讓国于長子参議慶篤、蟄居別邸。姦党得勢。停孫次職、貶大番組。謂公族松平頼讓訴斉昭冤。本出於孫次計。褫食禄、禁錮官舎。後斉昭遇赦、孫次得帰家。嘉永六年癸丑。復為郡奉行。後三年。進班先手同心頭。安政三年丙辰。国中大風雨。田穀不稔。斉昭召孫次於江戸邸問之。孫次細陳其状、上救恤策。斉昭賜和歌賞之。孫次在職十五年。興学校、均田賦、部内大治。嘗著一書論檢田法、画殖産策。名曰恩之露。前此郡宰有吉成信貞。輿人頌之。孫次与信貞斉名。五年。朝廷賜別勅于慶篤。孫次与若年寄杉浦安馳赴江戸邸。勸慶篤速奉朝旨。幕府聞之、捕水藩家老安島帶刀・京師留守居賴飼吉左衛門等。使京都所司代酒井若狹守、抵伝奏広幡中納言奏、請奉還勅書。曰、是為政令出於二途。乃大乱之基也。強之然後可。於是閹老安藤対馬守信正、抵慶篤許、勸奉還。正党諸士聞之、怒曰、主上倚頼我君、特賜赦書。在武門為無上之榮。如何無故而奉還之乎。万一有勅奉還、宜直獻之朝廷。寧容幕人関涉乎。幕吏不能制之。告信正緩還納期。不聽。曰、濡滞則將不利於主家。藩吏懼、報之水戸。群議紛紛不決。家老大場主膳正景淑、進曰、是殆非真朝命也。苟從幕人所為、則必違尊王之道。亦非佐幕之義。一旦雖歸無事、終致国勢不可振起。然亦不忍抗之也。將奉勅書赴江戸。壯士等益怒。將要諸途奪之、屯聚各処。慶篤聞之大驚曰、自非金高、誰能鎮之。金高謂孫次与高橋多一郎。二人気節名望、為一藩所推。故有此称也。二人受命往諭、使衆退散。而其心大憤之。



相議曰、姦臣蔑如朝廷、壞亂祖制、親外夷、殺義士、無所顧忌。恐德川氏二百余年之業忽焉墜地。宜斬姦臣斷禍根。乃与薩藩士岩下佐次右衛門方平・有村雄介兼武・堀忠左衛門貞馨等密相謀以窺之。及幕府命徙齊昭于水戸、孫次等亦將去江戸。同志某、來請速舉事。孫次謂、大事不得疎忽。万一有錯、禍且不測。宜潛匿以待時機。約後期歸水戸。則見褫祿屏居。後幕府又伝朝命、督奉還赦書。孫次以為好機。与多一議、報江戸同志。適堀貞馨等、將歸國。曰、請姑待之。孫次謂、機不可失。且誅一姦臣、不須多人、寧可猶予乎。多一以為然。欲抵西國募同志舉事。而孫次意以明年三月三日為期。明年二月二十八日。与其子勇次郎俱發家。書和歌于屏風曰、

君能為米世能為米尽須真心波二荒能神毛見會那波須良牟

又贈一封書于藩吏。稱將捨身犯難、以雪前公冤。兼俾公奉行勅旨、請以聞。遂變姓名曰西村東右衛門。取間道抵江戸。見有村雄介告之。雄介感歎。且曰、同人有故歸藩矣。斬姦一舉、請委我兄弟。孫次不聽曰、誅一姦人而不得興勤王之兵、則是大業不成也。今日此舉、且試少壯輩伎倆。果能了之、則与君俱上京、乘機舉義兵耳。君馳歸。說君侯率兵東上、則鎮西志士不招而至矣。此事非君不可。雄介以為然。留其弟治左衛門入斬姦隊。三月朔日。同志士來會于孫次僑居者、十余人。歎寡弱形於色。孫次扼腕曰、所目唯一人耳。以十余人当之、何難之有。以為難也、某雖老、請先登。一座以為然。且曰、不煩先生下手、吾輩拋身了之。先生宜保余命舉義兵。異口同声而応。孫次乃授方略曰、宜分為二隊、一人走出衝敵前驅。則彼將驚惶失度。因自左右起、目轎斬入、即獲其首。一人提首而

走。一人持訴狀首告老中邸。一人入大藩諸侯邸。一人馳來報我其狀。飲酒徹曉乃訣。孫次与雄介俱宿品川駅、以俟明日報。翌早遽大雪。十四人、身纏簑笠、為微者裝、在桜田門外、以俟直弼登營。頃之、直弼駕轎而至。從士數百人。擁衛前後。森五六郎奮前向轎。發小銃攔前驅。敵衆呼狼藉欲縛之。五六郎捨銃提刀。我衆自左右齊起。稻田重藏与敵格闘、身受十余瘡即死。山口辰之介遇敵党河西某、疾闘傷數人。大呼好男兒直斬之。身負傷不能步。屠腹死。有村治左衛門多殺敵衆、隔轎簾刺直弼。身負深瘡。広岡子之次郎獲直弼首、与治左走至龍口。瘡重不能行。授首邏卒、同治左屠腹死。其余諸人、皆能勇闘殺傷過當、敵衆潰散。二人聞之、晝夜兼行抵伊勢国四日市、会薩藩有司坂口某在旅舍待雄介至。將護送之之其国。雄介告孫次同抵伏見、号召志士。孫次從之。入薩邸。時桜田變達上国。幕府伝令部索党与甚嚴。同志之徒、所在潛匿、無復一人來會者。將從雄介赴西国、以窺世人動靜。上密書于薩侯。自陳其誅除姦魁。謂、乘此機鼓舞志士、正幕政除外患、以安宸襟宣皇威。会某不許孫次同行。独監護雄介而去。孫次知其難免。出懷中文書尽焚之。十五日。伏見奉行、使捕吏數十人來圍邸門。孫次端坐就縛。吏押送江戸保管稻葉伊予守邸。文久元年七月二十六日。処斬。時年五十八。三年七月。幕府奉朝旨、追赦其罪。自小塚原歸葬水戸。使子勇次郎継家。初桜田事終。佐野竹之介・大関和七郎等、就閣老脇坂中務大輔及細川越中守自首。其文陳斬姦意甚詳。皆係孫次与多一草案。多一以二月十八日發水戸。挈子莊左衛門而行。路經岐蘇。三月三日。達太田駅。遇大風雪。欣然顧莊右曰、此天助我也。事必成矣。吾亦急舉義兵耳。兼行抵大坂、会

同藩人謀義舉。大喜、作主意書、呈緞紳某氏、遂達御覽。而幕府搜索甚嚴。使捕吏數十人來圍。乃遁入四天王寺刺刃於腹、將布緊縛。提血刀咄嗟向吏、將陳事由。壯氣凜然、眼光射人。捕手皆靡、無敢來近者。遂投坊官小川俊直家、請借一間房。書絕命詞、徐解布深刺刃。血淋漓噴進。莊右以其血大書、誅売国姦賊井伊云数字於窓紙。亦賦絕命詞剖腹殉父。多二年四十有七、莊右十有九云。二人暗殺之行、不可為訓。而天下聞者、莫不為快。豈非井伊氏擅殺使然乎。井伊氏建儲墨守祖法、而攘夷則不從旧章。固如不得已者焉。殊不知瑣穢之說。雖非人情、自祖考傳之、以為拳国大典。人心習与性成、牢不可破。而無善處之者。曾不使諸藩志士遊歷海外各国、以察其形勢情俗。一心進取、以殺其不平之氣。必欲以威力克之以保寵祿、庶幾永世無事。是其所以致自滅之禍、而促幕府之顛覆也。

井伊直弼、儲を建つるを争ひ開港を主とす。徳川氏の一代と為りてよりの大事機なり。遂に擲に志士を殺すに至る。而して金子孫次郎等の刺す所と為る。天の之を討つ者のごとし。豈に人心の違ふべからざるに非ざらんや。孫次郎、名は教孝。水戸藩士川瀬七郎右衛門教徳の二子なり。出でて金子氏に冒す。初め水戸侯中納言徳川齊修は子なく、弟齊昭あるのみ。執政等、或いは謀りて將軍の公子を迎へ立てんとす。孫次、同志と力心摧して齊昭を立つ。天保中。歩目附と為る。時に藩に二党あり。一に曰く正、一に曰く姦。孫次、武田正生(まさはなり)と上書して正党を助く。後、吟味役より奥右筆を経て、郡奉行に進む。弘化三年丙午。

齊昭、讒に罹りて譴を得、国を長子參議慶篤に譲り、別邸に蟄居す。姦党、勢を得。孫次の職を停め、大番組に貶す。公族松平頼讓に謂ひて齊昭の冤を訴ふ。本、孫次の計より出づ。食禄を褫ひて、官舎に禁錮す。後、齊昭の赦さるるに遇し、孫次も家に帰るを得。嘉永六年癸丑。復た郡奉行と為る。後三年。班先手同心頭に進む。安政三年丙辰。国中大いに風雨あり。田穀稔らず。齊昭、孫次を江戸邸に召して之を問ふ。孫次、細かく其の状を陳べ、救恤の策を上す。齊昭、和歌を賜ひて之を賞す。孫次、職に在ること十五年。学校を興し、田賦を均しくし、部内大いに治まる。嘗て一書を著して檢田法を論じ、殖産策を画す。名づけて『恩之露』と曰ふ。前の此の郡の幸に、吉成信貞なるものあり。輿人(うり)之を頌す。孫次、信貞と名を齊しくす。五年。朝廷、別勅を慶篤に賜ふ。孫次と若年寄杉浦安と、馳せて江戸邸に赴く。慶篤に勸めて速に朝旨を奉ぜしむ。幕府、之を聞き、水藩の家老安島(あじま)帯刀・京師留守居鶴飼吉左衛門等を捕ふ。京都所司代酒井若狹守(わさ)を以て伝奏広幡中納言(なかつな)に抵りて奏して勅書を奉還するを請はしむ。曰く「是れ政令の二途より出づ。乃ち大乱の基なり。之を強いて然る後に可なり」と。是に於て閣老安藤對馬守信正、慶篤の許に抵り、奉還するを勸む。正党の諸士、之を聞きて怒りて曰く「主上の我が君に倚頼して、特に赦書を賜ふ。武門に在りて無上の榮と為す。如何ぞ故なくして之を奉還せんや。万一に勅ありて奉還せば、宜しく之を朝廷に直獻すべし。寧ろ幕人の関渉を容れんや」と。幕吏、之を制するあたはず。信正に還納の期を緩めんことを告ぐ。聴かれず。曰く「濡滞(ぬじ)せば則

ち將に主家に利あらず」と。藩吏懼れ、之を水戸に報ず。群議紛紛として決せず。家老大場主膳正景淑<sup>⑩</sup>、進みて曰く「是れ殆ど眞の朝命に非ざるなり。苟も幕人の為す所に従はば、則ち必ず尊王の道に違はん。亦佐幕の義に非ず。一旦無事に帰すと雖も、終には国勢の振起すべからざるを致さん。然れども亦之に抗ふに忍びざるなり」と。將に勅書を報じて江戸に赴かんとす。壮士等益ます怒る。將に諸途に之を奪はんと要め、各処に屯聚す。慶篤、之を聞きて大いに驚きて曰く「金高に非ざるよりは誰か能く之を鎮めん」と。金高とは孫次と高橋多一郎とを謂ふ。二人の氣節名望は、一藩の推す所と爲る。故に此の称あるなり。二人、命を受けて往きて諭し、衆をして退散せしむ。而れども其の心は大いに之を憤る。相議して曰く「姦臣、朝命を蔑如し、祖制を壊亂し、外夷に親しみ、義士を殺し、顧忌する所なし。徳川氏二百余年の業の忽焉として地に墜つるを恐る。宜しく姦臣を斬りて禍根を断つべし」と。乃ち薩藩士岩下佐次右衛門方平<sup>⑪</sup>・有村雄介兼武<sup>⑫</sup>・堀忠左衛門貞馨等と密に相謀りて以て之を窺ふ。幕府の命じて斉昭を水戸に徙すに、孫次等も亦將に江戸を去らんとす。同志某、来りて速に事を挙げんと請ふ。孫次謂らく「大事は疎忽にするを得ず。万一に錯あらば、禍且に測られず。宜しく潜匿して以て時機を待つべし」と。後期を約して水戸に帰る。則ち禄を褫ひて屏居せらる。後、幕府、又朝命を伝へ、督して赦書を奉還せしむ。孫次、以て好機と爲す。多一と謀り、江戸の同志に報ず。適たま堀貞馨等、將に国に帰らんとす。曰く「請ふ姑く之を待て」と。孫次謂らく「機、失すべから

ず。且に一姦臣を誅せんとするに、多人を須たざるよりは、寧ろ猶予すべけんや」と。多一、以て然りと爲す。西国に抵りて同志を募り事を挙げんと欲す。而して孫次、意に明年三月三日を以て期と爲す。明年二月二十八日。其の子勇次郎と俱に家を發す。和歌を屏風に書して曰く、

君のため世のため尽くす真心は二荒の神も見そなはすらむ

又一封書を藩吏に贈る。称す「將に身を捨て難を犯して、以て前公の冤を雪ぎ、兼ねて公をして勅旨を奉行せしめんとす。請ふ以て聞せん」と。遂に姓名を変じて西村東右衛門と曰ふ。間道を取りて江戸に抵る。有村雄介に見え之を告ぐ。雄介感歎す。且つ曰く「同人、故ありて藩に帰る。姦を斬るの一挙は、請ふ我が兄弟に委ねん」と。孫次、聴かずして曰く「一姦人を誅して勤王の兵を興すを得ずんば、則ち是の大業は成らざるなり。今日の此の挙、且に少壮輩の伎倆を試みんとす。果して能く之を了ふれば、則ち君と俱に京に上り、機に乗じて義兵を挙ぐるのみ。君馳せ帰れ。君侯を説きて兵を率いて東上せば、則ち鎮西の志士は招かずして至らん。此の事は君に非ざれば不可なり」と。雄介以て然りと爲す。其の弟治左衛門を留めて斬姦隊に入らしむ。三月朔日。同志の士の来りて孫次の僑居<sup>⑬</sup>に会する者、十余人。形に色に寡弱なるを歎ず。孫次、扼腕して曰く「目する所は唯だ一人のみ。十余人を以て之に当らば、何の難きことか之れ有らん。以て難しと爲さば、某、老いると雖も、請ふ先に登せん」と。一座、

以て然りと為す。且つ曰く「先生の手を下すを煩さずとも、吾が輩、身を抛ちて之を了へん。先生は宜しく余命を保ちて義兵を挙げべし」と。異口同声にして応ず。孫次、乃ち方略を授けて曰く「宜しく分かちて二隊と為り、一人は走り出でて敵の前驅を衝け。則ち彼は將に驚惶して度を失せん。因りて左右より起ち、轎を目して斬り入れば、即ち其の首を獲ん。一人は首を提げて走れ。一人は訴状を持して首に老中邸に告げよ。一人は大藩諸侯邸に入れ。一人は馳せ来たりて我に其の状を報ぜよ」と。飲酒、曉に徹して乃ち訣す。孫次と雄介と俱に品川駅に宿し、以て明日の報を俟つ。翌早、遽に大いに雪ふる。十四人、身に簑笠を纏ひ、微者の装を為し、桜田門外に在りて、以て直弼の登營するを俟つ。之を頃して、直弼、轎に駕して至る。従士、数百人。前後を擁衛す。森五六郎、奮ひ前みて轎に向ふ。小銃を發して前驅を攔る。敵衆、狼藉と呼び之を縛せんと欲す。五六郎、銃を捨てて刀を提ぐ。我が衆、左右より斉起す。稲田重蔵は敵と格闘し、身に十余瘡を受けて即ち死す。山口辰之介は敵の党河西某と遇ひ、疾く闘ひて数人を傷つく。大いに好男児と呼びて直ちに之を斬る。身に傷を負ひ歩くあたはず。腹を屠りて死す。有村治左衛門は多く敵衆を殺し、轎の簾を隔てて直弼を刺す。身に深瘡を負ふ。広岡子之次郎(14)は直弼の首を獲、治左と走りて龍口に至る。瘡重くして行くあたはず。首を邏卒(15)に授け、治左と共に腹を屠りて死す。其の余の諸人も皆能く勇闘して殺傷すること当を過ぎ、敵衆潰散す。二人、之を聞き、昼夜兼行して伊勢国四日市に抵り、薩藩有司坂口某の旅舎に在りて

雄介の至るを待つに会ふ。將に之を護送して其の国に之かんとす。雄介、孫次に告げて同に伏見に抵り、号して志士を召す。孫次、之に従ふ。薩邸に入る。時に桜田の変、上国に達す。幕府の伝令部、党与を索むること甚だ厳なり。同志の徒、所在潜匿して、復た一人も来り会する者なし。將に雄介に従ひて西国に赴き、以て世人の動靜を窺はんとす。密書を薩侯に上す。自ら其の姦魁を誅し除くを陳ぶ。謂ふ「此の機に乗じて志士を鼓舞し、幕政を正して外患を除き、以て宸襟(16)を安んじ皇威を宣せん」と。会たま某の孫次の同行するを許さず。独り雄介を監護して去る。孫次、其の免れ難きを知る。懷中の文書を出だして尽く之を焚く。十五日。伏見奉行、捕吏数十人をして来りて邸門を囲ましむ。孫次、端坐して縛に就く。吏、押して江戸に送り稲葉伊予守邸に保管せしむ。文久元年七月二十六日。斬に処せらる。時に年五十八。三年七月。幕府、朝旨を奉じ、其の罪を追赦す。小塚原より水戸に帰葬す。子の勇次郎をして家を継がしむ。初めて桜田の事終はる。佐野竹之介(18)・大関和七郎(19)等は、閣老脇坂中務大輔及び細川越中守(20)に就きて自首す。其の文は姦を斬るを陳べ意甚だ詳なり。皆、孫次と多一との草案に係る。多一は二月十八日を以て水戸を發す。子の莊左衛門を挈げて行く。路に岐蘇(21)を経。三月三日。太田駅に達す。大風雪に遇ふ。欣然として莊右を顧みて曰く「此れ天の我を助くるなり。事必ず成らん。吾も亦急ぎ義兵を挙ぐるのみ」と。兼行して大坂に抵り、同藩の人の義挙を謀るに会す。大いに喜び、主意書を作り、縉紳(22)の某氏に呈し、遂に御覽に達す。而れども幕府の搜索、甚だ厳なり。

捕吏数十人をして来り囲ましむ。乃ち遁れて四天王寺に入り刃を腹に刺し、布を將て緊縛す。血刀を提げて咄嗟に吏に向ひ、將に事由を陳べんとす。壯氣凜然として、眼光人を射る。捕手皆靡り、敢て来り近づく者なし。遂に坊官小川俊直の家に投じ、一間房を借りんことを請ふ。絶命詞を書し、徐に布を解き深く刃を刺す。血、淋漓として噴進す。莊右、其の血を以て「売国姦賊井伊を誅して云云」の数字を窓紙に大書す。亦絶命詞を賦し腹を剖きて父に殉ず。多一は年四十有七、莊右は十有九と云ふ。二人の暗殺の行ひは、訓と為すべからず。而れども天下の聞く者、快と為さざるはなし。豈に井伊氏の擅に殺すの然らしむるに非ざらんや。井伊氏は儲を建つるには祖法を墨守すれども、攘夷には則ち旧章に従はず。固に已むを得ざる者のごとし。殊に瑣瑣の説を知らず。人情に非ずと雖も、祖考より之を伝へ、以て挙国の大典と為す。人心習ひて与に性成り、牢として破るべからず。而れども之を善処する者なし。曾て諸藩の志士をして海外の各国に遊歴し、以て其の形勢情俗を察せしめず。一心に進取し、以て其の不平の氣を殺す。必ず威力を以て之に克ちて以て寵禄を保ち、永世の無事を庶幾ふ。是れ其の自滅の禍を致す所以にして、幕府の顛覆を促すなり。

—註—

- (1) 武田耕雲斎のこと。
- (2) 救いめぐむこと。
- (3) 吉成又右衛門。藤田幽谷に学び、郡奉行として一五年民政にあ

たった。嘉永三年、病死。

(4) ここでは庶民の意。

(5) 安政年間、老中堀田正睦が入京して外国互市を開くよう朝裁を迫った際に、子の幸吉との阻止に努めたり、一橋慶喜擁立に奔走したりなど、尽力した。吉左衛門から、日下部伊三次・安島帯刀に送った密書が押収され、死罪に処せられた。

(6) 酒井忠義。小浜藩主。幕末期にのべ一二年にわたって京都所司代の任にあった。一橋派の志士を弾圧して安政の大獄の発端を作ったほか、和宮降嫁にも尽力した。

(7) 広幡忠礼。和宮降嫁に尽力した久我建通・岩倉具視らを四奸二嬪と称し、近衛忠熙に弾劾書を提出するなどしたが、八・一八政変後に議奏を免ぜられた。慶応三年に許される。

(8) たよること。依頼に同じ。

(9) ぐずぐずすること。

(10) 大場一真斎。景淑は諱、主膳正は称。武田耕雲斎・岡田徳至らとともに水戸の三隠大夫と呼ばれ、勢力を持っていた。安政五年、水戸藩に密勅が下った際には返納不可の立場を取った。

(11) 水戸・薩摩両藩で謀った井伊直弼暗殺計画の中心人物。また誠忠組においても指導的役割をはたした。その外、薩英戦争後の和平交渉や、第二次長州征伐の出兵拒否など。維新後も要職を歴任した。

(12) 薩摩藩士。有村三兄弟（長男俊斎・三男治左衛門）の次男。金子孫二郎・高橋多一郎らと共に桜田義挙の指導者であった。義挙以後、京都へ向かう途中、四日市にて藩吏に捕らえられ、薩摩藩

に護送幽閉され、死を賜った。

(13) 仮住まいのこと。

(14) 安政六年、勅書返納の議が起こった際、長岡駅に屯集して阻止を謀った。桜田門外の変で重傷を負い、和田倉門に至って自刃した。

(15) 見回りの兵士のこと。

(16) 天皇の心のこと。

(17) 保護管理すること。

(18) 水戸藩士。井伊直弼要撃の決定とともに金子孫二郎・高橋多一郎の内意を帯びて黒沢忠治郎と出府し、万延元年正月、薩摩藩邸に入った。桜田門外の変の際、重傷を負い、脇坂邸に自訴し死亡した。

(19) 水戸藩士。水戸への勅書に対し幕府がその返納を迫った際、長岡駅に屯集して返納防止を計った。やがて脱藩し、桜田門外の変に参加。事件後、熊本藩邸に自訴した。死罪に処せられた。

(20) 龍野藩主脇坂安宅と肥後藩主細川斉護。ここではそれぞれの江戸藩邸をさす。

(21) 木曾路のこと。

(22) 身分の高い人のこと。

## 大橋訥菴

嘉安間、江戸儒士以正義鳴於世者、其人頗多。而大橋訥菴実為之稱首焉。訥菴、名正順、字周道、称順藏。訥菴其号。父曰清水

赤城。上野国赤城村人。住江戸修長沼流兵学。名声噪于一時。諸侯以高禄招之不応。訥菴幼好讀書懷大志。深沈有英略。年可二十。入林氏及佐藤一斎門。夜学無油、至請友人一七点灯。其学大進。人勸其開門戸聚弟子。訥菴不聽。曰、無財不得養人。古云、儒者樂清貧。是遁詞已。吾欲為国家教育英才。可無豪富合力乎。有大橋澹雅者。家素富。識見過人。嘗訪一斎語之曰、吾嘗散金穀救窮民。彼皆不学無智、不能裨益国家。吾熟察世間、有財者無学、有学者無財。若分財於学者使其道、則必為公益矣。一斎擊節称善。使見訥菴。淡雅大喜、遂配長女、使襲己後。訥菴時年二十六。開家塾於墨水西涯村松坊。聚教生徒。生徒日衆。名声漸興。尋仕宇都宮藩列士籍。嘉永末年。美艦來請互市。幕府命大學頭林健等往接。訥菴見健論事。健不能用。訥菴怒、絕交不復踵其門。上書幕府、陳其大害。又著元寇紀略。海内士氣、為之風靡。尋屏居小梅村、著關邪小言・弁耶蘇教流毒・洋人譎詐。其書尤為世珍賞。幕府不省。迨幕府与外人仮訂条約、延接使臣于江戸城、訥菴不堪痛憤。賦詩曰、

倉皇折膝拜夷蛮 苟且何知釀後患 恨殺滿朝林立士

一人無復似椒山

聞内勅下水戸藩大喜、詣水戸邸与同志謀。論建甚力。安政六年己未十月。頼三樹就刑。訥菴自至小塚原収其尸、建石表墓。幕吏見之、命倒之。未幾、大老井伊氏遭害。幕吏大按其獄。訥菴上書陳其不可不聽。尋聞閣老安藤津島寺信睦煽井伊氏遺焰、拒逆朝旨、按廢帝典故、訥菴益憤。乃与外国奉行堀利熙謀、極諫信睦。信睦不納。利熙遺書自尽。訥菴奮激謂、幕威内衰、外寇外迫。自非奉

還兵權于天朝、不可。文久元年九月。命門人上京、就正親町・岩倉諸卿獻秘策。其中有言。今日朝廷、似微弱而実強、幕府似強大而実弱。朝廷会勃興之運、幕府近衰斃之秋。時水藩人平山繁藏・下野人児島強助、与訥菴妻弟菊池孝兵衛謀刺安藤信正。來請教。不聽。曰、時機未熟。有毛利氏支族毛利筑前家人多賀谷勇・武州本庄郷士尾高長七二人。持孝兵衛手書來。謂訥菴曰、輪王寺宮在日光。左右無其人。往奉之。使孝兵衛輔之。誘宇都宮藩士拋筑波山、招水戸・結城兵、先生坐帷幙簾面、則攘夷先鋒、必属我矣。訥菴掉頭曰、尚早。以戒輕舉。二人心不自安。去江戸馳赴近国、称訥菴率義兵。多陰來会者。時有佐賀藩士中野晴虎称方藏。入訥菴門。与勇・長七等遊說近郷、為幕吏捕死于獄中。嘗贈書其友大木民平・江藤新平等、有言曰、有一二大藩、出兵護京。主上下勅幕府、奉還政權、沒收其管轄諸地、更給百万石、使家人有才能者得列朝臣。其諸藩則使保封邑如故、然後改門閥世官之旧制、擢用俊傑、無論士庶陪隸、則皇室之中興亦不甚難矣。其見蓋出于訥菴而抃充之者也。十一月八日。夜、勇・長七及河野通恒・小山朝弘等三十余人、齊迫訥菴断行。訥菴懇諭。前日獻已策於朝。且曰、攘夷勅下、則宜奉宮推孝兵衛助之。吾將西上有所為。苟背勅旨、則雖奉宮、無与叛人異也。衆以為然。約後期去。尋繁藏等屢過訪。訥菴乃授方略。作斬奸趣意書与同盟規約書与之。繁藏等大喜。未幾、得京師消息。報之孝兵衛、將西上号招同志。明年正月。宇都宮藩士岡田真吾・松本鎮太郎二人、欲推一橋刑部卿為將、糾合水藩諸士、以举義旗。介一橋氏臣山本繁三建言刑部卿。繁三反覆、告之幕府。幕府逮捕訥菴併幸

兵衛囚之。三島等聞之、恐事覺、誓死決議。十五日。要擊信睦于坂下門外。信睦負傷、而從士多死。三島等亦力尽皆戰死。訥菴在獄未知其變。幕吏謂、訥菴与謀。嚴加詰責。訥菴応曰、吾与同志議者、在於迎奉朝旨、匡正国家大典。其他毫無与知也。幕吏疑益甚。拷治愈嚴。身体痠痺、困臥数月。病漸篤。賦詩曰、

刑屍累累鬼火青 枕頭時覺北風腥 婆心憂世夜難睡  
起自窓端見大星

七月七日。幕府命幽訥菴于藩邸。十二月。終病没。年四十七。訥菴學術純正、特精性理。初主王学、後歸朱子。其講經也、弁舌如流、聽者心醉。兵学挾家庭遺訓、參酌新說。尤留心於防海。世或以其主張攘夷、故或目為不通海外事情。殊不知太平日久、人心怯惰、畏敵如虎、自非一戰、不足以振起之、故為此說也。一日諸儒會議時事。或問訥菴曰、近聞先生深查西洋情形。如与平生持論相反者。幕府命先生使外国、則諾之否。訥菴曰、然。随俗吏後、屈膝穹廬、雖死不能耳。堂堂威儀、若古遣唐使、則可応命也。座有小笠原敬齋作色曰、生君子国、汚身醜夷、不似先生之言。豈有異故乎。請教之。訥菴不敢抗曰、吾子誠正直学者也。笑而止。訥菴教生徒不加譴責、諒諒誘導、自然端正、興起忠孝氣節。門人唱尊攘殉国家者甚多。文久初。余見安井息軒、談及訥菴。息軒陋訥菴。又見若山勿堂、問訥菴為人。勿堂大排訥菴。余未知其孰是非。而歎政府用人之難矣。勿堂阿波人。称壯吉。受学鉄野復堂。復堂嘗在古賀精里門。帰国与柴碧

海齊名。稍相隙、落魄終身。其門有勿堂及余旧師岩本贅菴等。勿堂抵江戸、入佐藤一斎門、為其女婿。而一斎外孫焘治、為訥菴義子。勿堂謂其為訥菴誤。勿堂旁修兵学、不讓清水赤城。下帷兩国坊、与息軒・訥菴等爭衡。其門有若勝安房・板垣退助・土方久元諸人。亦異常人也。余謂、仮令三人並立於朝、則其不致反目交鬭者希矣、孰能左右之者。不有君子其如之何。顧息軒・訥菴等諸人、有功于世道人心、決非後世少年才子所企及。少年才子則厚祿大官、門庭生光。而諸人則落魄以死。曾無贈位等榮其身者、獨何与。

嘉安の間、江戸の儒士の正義を以て世に鳴る者は、其の人頗る多し。而して大橋訥菴は実に之が称首たり。訥菴、名は正順、字は周道、称は順蔵。訥菴は其の号。父は清水赤城と曰ふ。上野国赤城村の人なり。江戸に住し長沼流兵学を修む。名声、一時に噪たり。諸侯、高祿を以て之を招くも応ぜず。訥菴は幼くして読書を好み、大志を懷く。深沈にして英略あり。年、二十なるべし。林氏及び佐藤一斎の門に入る。夜学ぶに油なく、友人に請ひて一に点灯にならぶに至る。其の学大いに進む。人、其の門戸を開きて弟子を聚むるを勧む。訥菴聴かず。曰く「財なくんば人を養ふを得ず。古に云ふ「儒者は清貧を楽しむ」と。是れ遁詞となるのみ。吾、国家の為に英才を教育せんと欲す。豪富の力を合することなかるべけんや」と。大橋澹雅たんがなる者あり。家素より富む。識見人に過ぐ。嘗て一斎を訪ねて之に語りて曰く「吾嘗て金穀を散じて窮民を救ふ。彼皆不学無智にして、国家に裨益するあたは

ず。吾熟じゆつら世間を察するに、財ある者は学なく、学ある者は財なし。若し財を学ある者に分ちて其の道を行はしめば、則ち必ず広益を為さん」と。一斎、節を撃ちて善しと称す。訥菴に見えしむ。淡雅、大いに喜び、遂に長女を配し、己の後を襲はしむ。訥菴、時に年二十六。家塾を墨水の西涯の村松坊に開く。聚めて生徒を教ふ。生徒日に衆し。名声漸く興る。尋で宇都宮藩に仕へ士籍に列す。嘉永末年。美艦来りて互市せんことを請ふ。幕府、大学頭林健けん等に命じて往接せしむ。訥菴、健に見えて事を論ず。健、用いるあたはず。訥菴怒り、交わりを絶ちて復た其の門に踵せず。幕府に上書して、其の大害を陳ぶ。又『元寇紀略』を著す。海内の士氣、之が為に風靡す。尋で小梅村に屏居し、『關邪小言』『弁耶蘇教流毒』『洋人謗詐』を著す。其の書、尤も世に珍賞せらる。幕府省みず。幕府と外人と条約を仮訂し、使臣を江戸城に延接するに迫おびて、訥菴、痛憤に堪えず。詩を賦して曰く、

倉皇し 膝を折りて夷蛮に拝す  
荷かり且そめに 何ぞ後患を醸すを知らん  
恨み殺す 満朝 林立の士  
一人も復た椒山に似るものなし

内勅の水戸藩に下るを聞きて大いに喜び、水戸邸に詣り同志と謀る。論建、甚だ力つとむ。安政六年己未十月。頼三樹、刑に就く。訥菴、自ら小塚原に至りて其の尸を収め、石表墓を建つ。幕吏之



を見、命じて之を倒さしむ。未だ<sup>い</sup>幾<sup>くばく</sup>ならずして、大老井伊氏害に遭ふ。幕吏大いに其の獄を按ず。訥菴、上書して其の不可なるを陳ぶるも聴かれず。尋<sup>ついで</sup>で閤老安藤津島寺信睦<sup>しんむつ</sup>が井伊氏の遺焰を煽りて、朝旨に拒逆し、廢帝の故典を按ずると聞きて、訥菴益ます憤る。乃ち外国奉行堀利熙と謀りて、信睦を極諫す。信睦納れず。利熙、遺書して自尽す。訥菴奮激して<sup>おも</sup>謂<sup>はく</sup>らく「幕威は内に衰へ、外寇は外に迫る。兵権を天朝に奉還するに非ざるよりは、不可なり」と。文久元年九月。門人に命じて京に上らしめ、正親町・岩倉諸卿に就きて秘策を献ぜしむ。其の中に言あり。「今日、朝廷は、微弱に似れども実は強く、幕府は強大に似れども実は弱し。朝廷は勃興の運に會ひ、幕府は衰斃の秋<sup>とき</sup>に近し」と。時に水藩の人平山繁藏<sup>はんざう</sup>と下野の人児島強助<sup>きやうすけ</sup>、訥菴の妻の弟菊池孝兵衛と安藤信正を刺さんと謀る。来りて教を請ふ。聴かず。曰く「時機未だ熟さず」と。毛利氏の支族毛利筑前の家人多賀谷勇<sup>ゆう</sup>・武州本庄の郷士尾高長七の二人あり。孝兵衛の手書を持ちて来る。訥菴に謂ひて曰く「輪王寺宮、日光に在り。左右に其の人なし。往きて之を奉ぜん。孝兵衛をして之を輔けしめよ。宇都宮藩士を誘ひて筑波山に拠り、水戸・結城の兵を招き、先生は帷帳に坐して籌画<sup>しうわ</sup>せば、則ち攘夷の先鋒、必ず我に属さん」と。訥菴、頭を掉<sup>ふ</sup>ひて曰く「尚ほ早し」と。以て輕拳を戒む。二人、心に自ら安んぜず。江戸を去りて馳せて近国に赴き、訥菴、義兵を挙げと称す。陰<sup>ひそ</sup>に來り會する者多し。時に佐賀藩士中野晴虎<sup>はるこ</sup>の方藏と称するものあり。訥菴の門に入る。勇・長七等と近郷に遊説し、幕吏に捕へられ獄中に死す。嘗て書を其

の友大木民平<sup>たけのたけみへ</sup>・江藤新平<sup>えとうしんへい</sup>等に贈り言ありて曰く「一二大藩ありて、兵を出して京を護る。主上、勅を幕府に下し、政權を奉還し、其の管轄の諸地を没収し、更に百万石を給し、家人の才能ある者をして朝臣に列するを得しむ。其の諸藩は則ち封邑を保たしめること故の如くし、然る後に門閥世官の旧制を改め、俊傑を擢用し、士庶陪隸を論ずることなくんば、則ち皇室の中興も亦甚だしくは難からず」と。其の見は蓋し訥菴より出でて之を拡充せし者なり。十一月八日。夜、勇・長七及び河野通恒<sup>とく</sup>・小山朝弘<sup>あきひろ</sup>等三十余人、斉しく訥菴に断行を迫る。訥菴<sup>ねんご</sup>懇<sup>こ</sup>ろに諭す。「前日、己の策を朝に献ず」と。且つ曰く「攘夷の勅下れば、則ち宜しく宮を奉じて孝兵衛を推して之を助くべし。吾は將に西上して為す所あらんとす。苟<sup>い</sup>も勅旨に背けば、則ち宮を奉ずと雖も、叛人と異なるなきなり」と。衆、以て然りと為す。後期を約して去る。尋<sup>ついで</sup>で繁藏等、屢<sup>しばしば</sup>しば過り訪ぬ。訥菴、乃ち方略を授く。斬奸の趣意書と同盟の規約書とを作りて之に与ふ。繁藏等大いに喜ぶ。未だ幾ならずして、京師の消息を得。之を孝兵衛に報じ、將に西上して同志を号招せしめんとす。明年正月。宇都宮藩士岡田真吾<sup>まご</sup>・松本鎮太郎<sup>ちんたろう</sup>の二人、一橋刑部卿を推して將と為し、水藩諸士を糾合して、以て義旗を挙げんと欲す。一橋氏の臣山本繁三を介して刑部卿に建言す。繁三反覆し、之を幕府に告ぐ。幕府、遽<sup>はな</sup>に訥菴併びに幸<sup>ま</sup>兵衛を捕へ之を囚す。三島等、之を聞き、事の覚はるるを恐れ、死を誓ひて議を決す。十五日。信睦を坂下門外に要撃<sup>えうげき</sup>す。信睦、傷を負ひ、従士の死す

るもの多し。三島等も亦力尽して皆戦死す。訥菴、獄に在りて未だ其の変を知らず。幕吏おもへ謂いらく「訥菴、謀に与みす」と。厳しく詰責を加ふ。訥菴応へて曰く「吾、同志と議せし者は、朝旨を仰奉し、国家の大典を匡正するに在り。其の他は毫も与あづかり知るなきなり」と。幕吏、疑ふこと益ます甚だし。拷治すること愈いよ厳なり。身体痿痺し、困臥すること数月。病漸く篤し。詩を賦して曰く、

刑屍 累累 鬼火青し

枕頭 時に覚ゆ 北風の 腥なまぐさきを

婆心Ⅱ 世を憂へて 夜 睡り難し

起ちて窓端より大星を見る

七月七日。幕府、命じて訥菴を藩邸に幽す。十二月。終つひに病没す。年四十有七。訥菴は學術純正にして、特に性理Ⅱに精くはし。初め王学を主とし、後に朱子に帰す。其の経を講ずるや、弁舌流るるが如く、聴く者心酔す。兵学は家庭の遺訓に拠りて、新説を参酌す。尤も心を防海に留む。世、或いは其の攘夷を主張するを以ての故に、或いは目して海外の事情に通ぜずと為す。殊に太平の日久しく、人心怯懦にして、敵を畏るること虎の如く、一戦に非ざるよりは、以て之を振起するに足らざるを知らざるが故に、此の説を為すなり。一日、諸儒、会して時事を議す。或ひと訥菴に問ひて曰く「近ごろ、先生、西洋の情形に深査すと聞く。

平生の持論と相反する者の如し。幕府の先生に命じて外国に使せしむれば、則ち之を諾すや否や」と。訥菴曰く「然り。俗吏の後に随ひて、膝を穹廬Ⅱに屈するは、死すと雖も能くせざるのみ。堂堂たる威儀ありて、古の遣唐使の若くんば、則ち命に応ずべきなり」と。座に小笠原敬斎Ⅱあり色を作して曰く「君子の国に生まれ、身を醜夷に汚すとは、先生の言に似ず。豈に異故あらんや。請ふ之を教へよ」と。訥菴、敢て抗はずして曰く「吾子は誠に正直の学者なり」と。笑ひて止む。訥菴の生徒を教ふるや譴責を加へず、諒諒として誘導し、自然に正に帰し、忠孝の氣節を興起せしむ。門人の尊攘を唱へ、国家に殉ずる者、甚だ多し。文久初。余、安井息軒Ⅱに見え、談、訥菴に及ぶ。息軒は訥菴を陋とす。又、若山勿堂Ⅱに見え、訥菴の人と為りを問ふ。勿堂も大いに訥菴を排す。余、未だ其の孰いづれが是か非かを知らず。而して政府の人を用いることの難きを歎ず。勿堂は阿波の人なり。壮吉と称す。学を鉄野復堂Ⅱに受く。復堂は嘗て古賀精里Ⅱの門に在り。国に帰りて柴碧海Ⅱと名を斉しぐす。稍やや相隙ありて、落魄して身を終ふ。其の門に勿堂及び余の旧師岩本贅菴Ⅱ等あり。勿堂は江戸に抵いたり、佐藤一斎の門に入り、其の女婿と為る。一斎の外孫泰治は、訥菴の義子たり。勿堂おもへ謂いらく「其れ訥菴の為に誤る」と。勿堂は旁に兵学を修め、清水赤城に譲らず。帷を両国坊に下し、息軒・訥菴等と衡を争ふ。其の門に勝安房Ⅱ・板垣退助Ⅱ・土方久元Ⅱの若き諸人あり。

亦常に異なる人なり。余おも謂いらく「仮たと令ひ三人朝に並び立てば、則ち其の反目交闘を致さざる者ことは希まれなるとも、孰たれか能く之を左右する者ぞ。君子あらずんば、其れ之を如何せん」と。息軒・訥菴等の諸人を顧みるに、世道人心に功あること、決して後世の少年才子の企及する所に非ず。少年才子は則ち厚禄大官たりて、門庭に光を生ず。而るに諸人は則ち落魄して以て死す。曾て贈位等の其の身に榮する者なきは、独り何ぞや。

―註―

- (1) 言い逃れ、逃げ口上のこと。
- (2) 大橋淡雅。初め医者を目指したが宇都宮の豪商菊池家の養子となり、商才を発揮。呉服・木綿・質屋・両替などを扱い、一代にして巨富をなした。大橋訥菴を娘の婿とした。
- (3) 林壮軒。第十代大学頭。林述斎（第八代）の三男櫻宇（第九代）の三男。
- (4) (その一) 堀田正睦の註16に既出。
- (5) 平山兵介。繁義は諱。宇都宮の児島強介と安藤信正要撃の謀議を行う。坂下門外の変で闘死。
- (6) 藤田東湖・茅根伊予之介・大橋訥菴らに師事した。坂下門外の変に際しては、平山兵介とともに準備に当たったが、壮挙の際は病にて帰郷中であった。後に捕らえられ獄死した。
- (7) 大場一真斎らと交わる。坂下門外の変で、大橋訥菴・中村方蔵らとともに捕らえられるが、特赦により釈放された。元治元年に

病死。

- (8) はかりごとをすること。
- (9) 多賀谷勇らと日光輪王寺宮擁立運動を謀った。坂下門外の変に關係ありと疑われ、獄中にて死亡した。
- (10) 大木喬任。佐賀の人。幕末期は尊王を唱え同志と共に藩内改革を推進した。維新後は徴士となり、さらに参与として東京府知事を兼任した後、民部大輔、民部卿、文部卿、参議、司法卿などを歴任した。
- (11) 幕末維新の政治家。佐賀の人。幕末期は尊攘運動に参加し、三条実美らと交わった。維新後は明治政府の中核となったが、明治六年政変の後、佐賀の乱を起こして処刑された。
- (12) 河野頭三。下野の人。医者。堀利熙邸に寄寓して寵を受けたが、利熙が安藤信正に辱められて屠腹したので、信正を憎み、坂下門外の変に参加した。
- (13) 小山鼎吉。医業のかたわら家塾を開く。水戸藩士に知人が多く、また大橋訥菴・菊池教中らとも交遊があった。坂下門外の変に捕らえられるが、許されて帰郷した。
- (14) 大橋訥菴・春日潜庵らに学ぶ。文久元年、松本棋太郎とともに一橋慶喜を擁して日光に挙兵しようとして大橋訥菴に謀り、露見して翌二年正月、坂下門外の変の一味ともども逮捕され、中追放に処せられた。
- (15) 松本棋（棋）太郎。医者。岡田真吾の妻の兄にあたる。坂下門外の変に参画し、事件前日に逮捕される。維新後は鹿児島裁判所判事などを務めた。

(16) 敵を待ち受けて撃つこと。

(17) 老婆心に同じ。

(18) 朱子学のことを性理学とも言う。

(19) 弓なりに張った天幕の住居のことで、もともとは匈奴の住居、あるいは匈奴をさす。ここでは外国全般をさすか。

(20) 小笠原敬次郎。播磨の人。小倉藩に仕える。安積良斎・佐藤一斎・大橋訥菴らに学ぶ。尊攘思想を持ち、攘夷実行の詔勅後は長州藩と共に異船砲撃を主張した。

(21) (その一) 梁川星巖の註39に既出。

(22) 江戸後期の儒学者。阿波の人。佐藤一斎に朱子学を学ぶ。美濃国岩村藩の儒臣となった。後に昌平黌儒官となり、門下に勝海舟・板倉退助・土方久元らがいた。

(23) 鉄(くろがね)復堂。江戸後期の儒学者。阿波の人。古賀精里に学んだ。

(24) 江戸中期の儒者。佐賀の人。大坂で尾藤二洲・頼春水と交わり、朱子学を信奉。後に昌平黌で経学を講じ、さらに幕府の儒官として林祭酒・柴野栗山・尾藤二洲らと学政を振興した。

(25) (その一) 藤森天山の註23に既出。

(26) 江戸後期の阿波藩の儒者。岡本韋庵・有井進齋らを育てた。

(27) (その一) 西郷隆盛の註13に既出。

(28) 土佐藩士。攘夷論を唱えるも、急進的な武市瑞山とは対立していた。後に西郷隆盛と会見して薩土盟約を結ぶ。維新後は征韓論論争に破れた後、自由民権運動に投じ、要職を歴任した。

(29) 土佐藩士。若山勿堂・藤森弘庵に学び、志士と交わった。土佐

勤王党に参加し活動。山内容堂に直言して叱責され、帰国を命ぜられたが、三条実美の信頼が厚かったため京に留まった。その後も倒幕運動に参加し、中岡慎太郎とともに薩長同盟の実現に尽力した。維新後も要職を歴任した。

### 堀利熙

幕人主攘夷、好容正義、敢進取者、莫如堀利熙。利熙、字欽文、初称省三郎。号有梅。拜織部正。幕府旗下土堀伊豆守利堅之子也。幼好讀書、長以經国自任。安政中。擢監察、転函館奉行、既而為外国奉行。当此時、天皇下攘夷之詔。而外人益猖獗、屢侮辱我民。利熙奮激、説諭外人、使之謝無狀。時論譴之、而閣老安藤信正等、誓外人恫喝、將築其館於城南御殿山。利熙切諫、信正励声喝之。利熙帰家、慨然作書遣信正。有言曰、

向不顧微軀激論妄答。其罪当万死。乃碎肝腦絞腸血、聊述鄙言。閣下請少容焉。墨夷都督、微行貴邸、專論我政務。閣下共被同餐、尊之如師父、遂許刑典数部。彼醉倒之余、戲於閣下侍妾、閣下許而与之。彼請築居館于御殿山、閣下遂許之。此既犯大義者、莫甚焉。窃聞彼專論廢帝之事、閣下使国学者按我旧典、私議其事。吁、謂之何哉。実天下大賊、天誅所不容也。某今屠死。其言也必善。閣下請少容焉。臨書不勝泣涕。

乃屠腹而死。年四十三。実万延紀元冬十一月五日也。書入信正勿聴。利熙乃召其僕從河野頭三曰、古称主辱臣死。汝勿忘此語。頭三感激竊時。於是乎有坂下之事焉。初利熙之就任箱館也、專心防

海、善御管内。剪榛荆、開道路、伝種痘法于夷落。始乘兩桅船發函館至品川灣。水戸侯徳川景山、貽國詩激獎之。嘗巡視蝦夷、過西岸神岬。凡船過此、必具酒牲虔祇尽礼。謂不如此則風浪忽起、舟乃覆沒。且嚴禁內地婦女至岬以北。謂有大變也。利熙曰、吾奉命巡視辺疆。將大拓開之也。何物妖神敢妨沮之者。向其祠發巨砲而過焉。土人始悟其妄。婦女亦得到小樽・石狩等。札幌有在住士民、亦創於此。時利熙遂巡視東西岸、抵柯太、撫綏土人。東北至盤香、西北至幌子谷地而歸。文久中。余航柯太抵雷石香。有小祠。祭八幡太神。土人謂織部公所建。公巡視至此止。嘖嘖賞其功德。先是行奧地者、有間官倫宗等。倫宗航滿州抵寧古塔而歸。利熙使從者視察奧地。而後行者數人、並未達極北鵝小門也。余自住柯太數年。始獲一周全嶋八百里。及維新、奉命董督全嶋。始募男女徙住其地、撫育土人、達極北奧地。聽肉分・小六子諸夷歸化服役、皆從幕府撫蝦夷之法。實因利熙等為之首唱。利熙母林氏。實大内記林述齋之女也。其學術蓋有所自。其在家也、儉素簡朴、絕無幕吏驕奢之風。庭多種梅、退食之後、吟咏其下。因有有梅之号。常慕諸葛亮・陶潛為人。嘗詠懷曰、

曠世奇才欽兩賢 行藏易地業皆然 氣節千秋出師表  
清高万古去來篇 苦辛本識由三顧 忠勇無心戴二天

男子功名応若此 縱教一醉曲肱眠

其抱負蓋如此。殆幕末偉人也。其遺安藤氏書、或称非其手筆。而安藤氏聰敏忠誠、決非如書中所云。此說也、余喜聞之。然當時其書傳播天下、家家誦之、而無復一人為之弁駁者何歟。拓地之事、余推利熙為第一。余柯太之任、与利熙無異。遇豪傑紛進、責余撫

育照旧。余憂悶欲死、遂辭罷。其慙利熙多矣。

幕人の攘夷を主とし、容を好み議を正し、敢て進取する者は、堀利熙にしなくてはなし。利熙、字は欽文、初めは省三郎と称す。号は有梅。織部正を拝せらる。幕府旗下の土堀伊豆守利堅の子なり。幼くして読書を好み、長じては経国を以て自任す。安政中、監察に擢でられ、函館奉行に転じ、既にして外国奉行と為る。此の時に当りて、天皇、攘夷の詔を下す。而れども外人益ます猖獗にして、屢しば我が民を侮辱す。利熙奮激し、説きて外人を諭し、之をして状なきを謝せしめんとす。時論之を韙とするも、閣老安藤信正等、外人の恫喝を暫れ、將に其の館を城南御殿山に築かんとす。利熙切に諫むるも、信正は声を励まして之を喝する。利熙、家に帰り、慨然として書を作り信正に遺る。言ありて曰く「向に微軀を顧みずして激論妄答す。其の罪、万死に当る。乃ち肝腦を砕き腸血を絞りて、聊か鄙言を述べん。閣下、少しく容れんことを請ふ。墨夷の都督、微に貴邸に行き、専ら我が政務を論ず。閣下、共に餐を共にせられ、之を尊ぶこと師父の如くし、遂に刑典数部を許す。彼、酔倒の余り、閣下の侍妾に戯るるに、閣下許して之に与ふ。彼、居館を御殿山に築かんことを請へば、閣下、遂に之を許す。此れ既に大義を犯す者、焉より甚だしきはなし。窃に聞く「彼専ら帝を廢するの事を論じ、閣下、国学者をして我が旧典を按ぜしめ、私に其の事を議す」と。吁、之を何と謂はんや。実に天下の大賊にして、天誅も容れざる所なり。某、今、屠死す。其の言や必ず善

なり。閣下、少しく容れられんことを請ふ。書に臨みて泣涕に勝へず」と。乃ち腹を屠りて死す。年四十三。実に万延紀元冬十一月五日なり。書、信正に入るも聴かるるなし。利熙、乃ち其の僂従河野頭三を召して曰く「古称す「主辱めらるれば臣死す」と。汝、此の語を忘ることなかれ」と。頭三、感激し時を窺ふ。是に於てか坂下の事あり。初め利熙の箱館に就任するや、防海に専心し、善く管内を御す。榛荊を剪り、道路を開き、種痘法を夷落に伝ふ。始めて両桅船に乗りて函館を發し品川灣に至る。水戸侯徳川景山、国詩を貽りて之を激奨す。嘗て蝦夷を巡視し、西岸の神岬を過ぐ。凡そ船の此を過ぐるに、必ず酒性を具へて、度みて祇に礼を尽す。此の如くせずんば則ち風浪忽ち起り、舟乃ち覆没すと謂ふ。且つ内地の婦女の岬に至りて以て北するを嚴禁す。大變ありと謂ふ。利熙曰く「吾、命を奉じて辺疆を巡視す。將に大いに之を拓開せんとすればなり。何ぞ物妖神の敢て之を妨沮する者あらんや」と。其の祠に向ひて巨砲を發して過ぐ。土人、始めて其の妄なるを悟る。婦女も亦小樽・石狩等へ到るを得。札幌に在住の土民あるも、亦此に創まる。時に利熙、遂に東西の岸を巡視し、柯太に抵り、土人を撫綏す。東北は盤香に至り、西北は幌子谷の地に至りて帰る。文久中。余、柯太に航して雷石香に抵る。小祠あり。八幡太神を祭る。土人、織部公の建てし所なりと謂ふ。公の巡視、此に至りて止む。嘖嘖として其の功德を賞す。是より先、奥地に行く者は、間宮倫宗等あり。倫宗は満州に航し、寧古塔に抵りて帰る。利熙、従者をして奥地を視察せしむ。而る後に行く者数人なるも、

並びに未だ極北の鵝小門に達せず。余自ら柯太に住すること数年。始めて全嶋八百里を一周するを獲。維新に及び、命を奉じて全嶋を董督す。始め男女を募り其の地に徙り住ましめ、土人を撫育し、北の奥地を達し極む。肉分・小六子の諸夷の帰化服役するは、皆、幕府の蝦夷を撫するの法に従ふと聴く。実に利熙等、之が為に首唱するに因る。利熙の母は林氏。実に大内記林述斎の女なり。其の學術は蓋し自らする所あらん。其の家に在るや、儉素簡朴にして、絶へて幕吏驕奢の風なし。庭に多く梅を種え、退食の後、其の下に吟咏す。因りて有梅の号あり。常に諸葛亮・陶潜の人と為りを慕ふ。嘗て詠懷に曰く、

曠世奇才 両賢を欽ふ

行蔵 易地(Ⅱ) 業皆然り

氣節 千秋 出師の表(Ⅱ)

清高 万古 去來の篇(Ⅱ)

苦辛 本識 三顧に由る

忠勇 無心 二天を戴く

男子 功名 応に此の若くすべし

縦教 一醉 肱を曲げて眠る

其の抱負は蓋し此の如し。殆ど幕末の偉人なり。其の安藤氏に遣りし書は、或は其の手筆に非ずと称す。而して安藤氏は聡敏忠誠にして、決して書中に云ふ所の如きに非ず。此の説や、余喜びて之を聞く。然れども当時其の書は天下に伝播し、家家之を誦

し、復た一人も之た為に弁駁する者なきは何ぞや。拓地の事は、余、利熙を推して第一と為す。余が柯太の任は、利熙と異なるなし。豪傑の紛進するに遇ひて、余の撫育を責めて旧に照らす。余、憂悶して死せんと欲するも、遂に辞して罷む。其の利熙に慙づること多し。

―註―

- (1) 勢いがさかんで荒れ狂うさま。
- (2) 坂下門外の変のこと。
- (3) 民をいづくしみ安んじること。
- (4) ロ々にほめそやすさま。
- (5) 間宮林蔵。江戸後期の探検・測量家。地理学者村上島之允に学んだ後、伊能忠敬に師事。択捉測量の後、樺太へ渡り調査を行った。
- (6) 取り締まる。総監督をする。
- (7) 江戸後期の儒者。名は衡。美濃国岩村藩主松平乗蘊の三男。林家七世信敬に嗣がなかったので、幕命により林家を継いで大学頭に任ぜられた。林家中興の祖とされる。
- (8) 朝廷を退出して私宅に帰り食事をする事。
- (9) 三国蜀の丞相。字は孔明。劉備・劉禅の二代に使えた。
- (10) 陶淵明。東晋の詩人。五柳先生と称し、酒と菊を愛し、田園生活を描いた自然派詩人。
- (11) 立場をかえること。
- (12) 諸葛亮が出陣の際に劉備の子劉禪に奉った上奏文。

(13) 陶潜の「帰去来辞」をさす。

(その一)の訂正

- 1. 54頁上19「刑獄罰」の「罰」を取る。
- 2. 54頁下14「類ね皆二三の君子の決脰・洞腹・伏鎖・潤鏹して、万死を敝げざるの節を以て、刑獄に倔強なればなり。」
- 3. 55頁上9「許して知言と為さんや。」
- 4. 56頁下6「至尊を奉ぜしは、神祖の威徳の鎮護に非ざるはなし。其の機一たび発して、沮遏すべからず。」
- 5. 57頁下7「爾（し）か云ふ。」
- 6. 61頁上11「美人を延接す。」
- 7. 62頁上16「禦すべし」と。又勅すらく「三家の忠誠憂国は、朕の依頼する所なり。」
- 8. 62頁下4「江戸に檻致せしむ。縉紳の攘夷を言ふ者を黜け、」
- 9. 64頁下7「躋」は或いは「偉」の誤りか。」を削除。
- 10. 66頁上21「眷遇至つて渥し。」
- 11. 68頁上7「人民に種殖することを勸む。」
- 12. 68頁下4「恭順の大節を保たしむるは、国家他日の福に非ざるなきを知らざるなり。」
- 13. 71頁下13「衣に勝えざる者のごとし。」
- 14. 72頁上4「論の建を競ふ。」
- 15. 74頁下6「旋（つ）いで郡を」
- 16. 76頁下11「傲慢なこと。」
- 17. 81頁下2「正睦」

18. 82頁上7「海禁を申厳して」
19. 83頁上24「正睦」
20. 83頁下24「政を為して此に出づることを知らず。」
21. 84頁下7「文化六年己巳」
22. 84頁下15「明治二年己巳」
23. 85頁上12「公は薩摩守・大隅守と称し、宰相を兼ね。」
24. 85頁上14「文化六年己巳」
25. 85頁下1「明治二年己巳」
26. 85頁下7「外国折衝の地と為し、以て其の内地に進入するを緩め、徐徐に開国せんと欲す。」
27. 86頁上1「開鎖の争に暇あらずして、以て国威を海外に伸ばすに足るに庶幾し。」
28. 87頁上23「略粗」
29. 89頁上18「其の胸中閑日月あること、想ふべし。」
30. 89頁下4「胆壮にして略粗なれば、衆に困りて己を信じ、大いに征韓の志を伸ばして、以て先君の知遇に答ふることあたはず。」
31. 89頁下13「其の乱民を誅し」
32. 89頁下17「即（たと）い」

\*訂正箇所については、狭間直樹先生をはじめとする諸先生方に御指摘いただいたものである。厚く御礼申し上げます。